

# レベルアップの構造と 八つの注意点

九折空也

生産性の高いセックス

運気を上げる方法

自意識過剰など存在しない

レベルアップの構造と、八つの注意点

夢は怒りによつて

レベル差の友人

あとがきに代えて宝箱

## 生産性の高いセックス

男は、死ぬまで、女を求めて、女を追いかけ回す。それは当たり前のことなので、そんなことに、いちいち「自論」なんか持ったってしょうがない。

中には、「女なんて」、というタイプの男もいるようだけれど、そういうタイプの男のことは、僕は知らない。

知ったってしょうがないし、取り入れることは何も無い。他の男がどう考えているかなんて、男同士で知ったってしょうがない。

競争相手が、来たら蹴落とさねばならないし、来ないなら来ないで、やった、助かるな、というぐらいにしか思わない。

何か、人それぞれに、事情はあるのだろうけれど、それはお互いさまなので、興味を向けるようなところではないはずだ。

僕などは、男なので、死ぬまで女を追いかけ回す。

それが、正しいのだとか、オスなのだとか、そんなことはどうでもいいのであって、僕が追いかけ回すのは女であり、女についての持論を追いかけ回すのではない。

女を見かけたら、好かれるか、嫌われるかする。

女にとつては、そういうのは、わかりやすい、というのが重要だと思う。本当にそうかは、知らないが、これは勝手にこちらがそう思っていることだ。

女を見かけたら、何はともあれ、寄っていく。

女に、悪い虫がつくというが、まったくそのとおりで、寄っていくのは確かに虫みたいだ。

それで、逃げられないように努力するが、女に気に入られなければ、逃げられるので、逃げられたらもう、追いかけて回さない。

押しの一手、というような口説き方もあるみたいだが、僕は押しの一手なんかで落ちる女が好きではないし、そういうやり方に生じる独特の田舎っぽい空気感も好きではない。

女を、求めて、追いかけて回すというのと、執着する、というのは、まったく別だと思ふ。

女を、獲得するといつても、最後は女のほうからこちらの胸へ飛び込んでこないで、成立しないのであって、最終的に、男の側がどれだけ必死になっても、男の意志で女をモノにすることはできないだろう。

モノにできるとしたら、それは単に、意志のない、棒切れみたいな女だけだ。

そういう女を落とすのに、渾身の力を込めるといふのは、さすがに悪趣味

が過ぎて、僕などはないといけない。たとえ力づくでレイプしたって、それで女が自分のモノになるといふわけではないだろう。

レイプという行為については、色々考えさせられるし、女の側もさんざん考えさせられたことがあると思うが、よくよく見ると、レイプについて一番悲惨なのは、実はその行為そのものではなく、女にモテなくて飢えている奴がそれをする、ということが悲惨なのだった。

内面的な貧しさや弱さによって、暴挙に出ただけ、というのが、これもやはり田舎っぽくて、救いがない。

つまり、現実的なレイプは、色男にレイプされるのではない、ということ。レイプというものを、憂鬱なテーマにしている。

レイプを空想して、性的な興奮を覚えるという、いわゆるレイプ願望は、多くの健全な女にあるし、男の側にも、それがなかったとしたら、それは解脱しているか病気のどちらかだが、このレイプ願望というやつは、現実的なことと接続はしていない、ただの空想だ。

一番似ている例は、少年が、兵隊となって、戦場で活躍するという空想だ。少年にとつて、銃を抱えて最前線で作戦行動をする空想は、胸を熱くするが、実際に戦場に出てマラリア蚊に噛まれて対人地雷を食らって死ぬということが、ロマンチックであるわけではない。

映画「ランボー」を観るときめかない少年は病気になるが、レイプ願望というのもそれと同じで、あくまで空想の中でこそ、それは胸を熱くするというだけだ。

僕は何人か、実際のレイプ被害者に会って話を聞いたことがあるが、聞けば聞くほど、これはやめておこうと思われた。

実際、聞きだすと、その被害者はかなり多いものだから、一人ひとり、防犯の意識は高くもってもらいたいと思う。

被害者がその後、暗くなるということに、同情したのではなく、「やっぱ何もしないで、暗くなる」ということを確認させられて、さすがに興が醒めた。

ちなみに、一番気の毒な具合になっていたのは、身内から長い間暴行を受けていた女性だったので、「ああやはり、長期に亘る家族の機能不全のほうに、単なる犯罪よりもダメージが大きいんだ」ということを、そのときはつくづく感じさせられた。

(こうして話すだけでも、何か心理学者のケースワーク研修みたいで、うっとうしいだろう。だからイヤなんだ)

とにかく、どうしたって結局のところは、女の側から男の側へ、飛び込んでくることでしか成立しないのだし、そんなところで鼻息をハアハア荒げたくない。

僕は男なので、死ぬまで、女を求めて追いかけて回し、女と見れば何であれ

寄っていく、そして口説き落そうと努力する、というだけだ。

そして、まず、百発百中で、女は僕のことなど見てくれない。それは当然で、そんなことはどうだっていいのだ。

僕のほうを向いておくれよ、とか、人として向き合うべきだろ、とか、そういうことは、露ほども思わない。

女を求めて追いかけて回すというのは、僕が勝手にやっていることなので、女の側からすれば、何のことやら知ったこっちゃないだろう。

人生や、仕事や、人間関係が、さびしい女なら、すぐ靡（なび）いてくれるのかもしれないが、そういうものに出くわしてコロッと口説き落とせたと、それを「やったあ」とはまったく思わない。

それは一種の難民であって、難民が、一息ついたらどこでもいいと、転がり込んでくるのは当たり前だ。

そして、難民に必要なのは、一息ついて安心できるだけの手当てであって、交友ではない。

タチの悪い男になると、そういう難民からまで、何かを筆取り取るうとすることがあるが、それはさすがに、殺伐としすぎていてどうかと思う。

僕だって、家出が流行していたある時期のこと、新宿で家出少女と知り合ったことぐらいあるが、せいぜい焼肉に連れて行って、簡易の宿をあてがってやったぐらいだ。

家庭の事情なんか聞いてもしようがないので、「十八になるまで待って、銀座のキャバクラで働いて、二年間必死で勉強して国公立の大学に入れ、そんな奴ゴロゴロいるから」というようなことを話した。

すると、なかなかしたたかなもので、少々ふさぎこんでいるふうに見えても、苦境を打開する未来への話には、案外食いついて聞き耳を立ててくる。情報を欲しがっているのだ。

キャバクラで働きながら歯科衛生士の資格を取っている人なんてたくさんいるし、その他、専門学校じゃなくても、職業訓練校というところもあるんだよ、というようなことを話した。

そういう話をしていると、家出少女も、ようやく、こちらの顔を見るようになる。

そうして考えると、男が、女に顔を見てもらえる唯一の方法は、「可能性」なのだなとつくづく思う。

女は、現実主義者だから、現実的に未来を豊かに出来る可能性に貪欲で、同時に、不要なストレスが大嫌いだ。

僕が、女と見れば寄って行って、女と見ればとにかく口説き落としてヤツてしまおうとするとき、唯一、そこに「可能性」への接続が感じられる場合だけは、女に邪険にされない。

僕の場合は邪魔くさくさでも、未来を豊かにする可能性は、邪魔くさくさくないからだ。

僕が、

「あれ？ 家に妹さんがいる？ 一緒にバスケット・ボールとかしている？」

と言い、

「なんでわかったの？」

と女が言うとき、別に僕の話が面白いのではなくて、

「そういうことを、感じ取れる能力が、人間にはあるの？」

という、「可能性」につられて、僕のことを無視しなくなるだけだ。

僕が、百年前のティーチャーズという酒を飲んだことがある、という話をすると、女は、その古酒を自分も飲めるかもしれない、という可能性にときめき、同時に、

「そういう、一般的でない、あちこちの秘密のところに、接続できる人なの？ わたしもそうになりたい」

という、やはり可能性にときめき、僕のことを無視しなくなるのだ。つまり、女としては、僕が異性として寄ってくることは何の興味もないが、「この男と関わってゆけば、わたしの未来は拡大するかもしれない」という予感には興味があるのだ。

僕が、なれなれしく女の身体に触って、「きれいなバストだなあ」といって、シャツを引っ張って胸元を覗きこむとき、女は、そのセクハラにときめているのではなくて、

「あれ？ なぜこんなことをされているのに、わたしやがらないんだろ」と

「この人は何か、これまでのわたしの知らないやり方で、わたしに接触してきている」

ということに興味を覚えている。

同時に、

「この人は、この調子で、この先も好き勝手にやっていくから、広がるし、楽しくなるに違いないわ。そしてそれはうらやましいことだわ」

ということ、僕のことを認め始めてくれている。

むろん、女にだって、性欲というか、性的なウフンアハンへの欲求はあるから、ここまでくれば、もうヤツてもいいかな、というぐらいには考えていたりするが、それだって、直接のウフンアハンの欲求というよりは、

「もしかしら、この今夜だって、すっごく気分のいい、日記に書きたくなるような一日にできるのかもしれない」

ということのほうに、興味を覚えている。

その意味で言えば、僕という男が、それ自体として女にモテたことは一度もないし、これからも一度だってないだろう。

そういう単純な意味で女にモテるためには、ばっちりオシヤレをキメたイケメンの細マツチョになって、元々そういう男がタイプだったの、という

女と会話し方方法がない。

それはつまり、ホスト的なモテ方だ。そしてホスト的なモテ方をしようとするれば、ホストそのものに勝てるわけがない。

それに比べれば、僕なんかは、女の未来を人質にして女を引っかけているわけで、卑怯千万と言わざるを得ない。

もちろん、そもそもを言えば、オシャレをキメたイケメンの細マッチョでもなしに、女にモテるといことは不可能だ。

オシャレをキメたイケメンの細マッチョでもないのに、モテようなどどわずかでも思った男は、それだけで万死に値し、末代まで恥じねばならない。

ここで、まさかとは思うが、男は「中身で勝負」とかいう、人類最大のジョークを真に受けている人はあるまいな？

女は、細マッチョのイケメンか、もしくは、自分の未来、そのどちらかを愛している。

もちろん、その両方を兼ね備えているのがベストだが、女はそこまでわがままではないので、「そのどちらか片方だけでもいいのよ？」と、心を広くして思っている。

僕なんかは、その片方、卑怯なほうの、女の未来を人質に取って脅迫するやり方しかできないが、そういった卑怯なやり方が、もし赦されることがあるとすれば、唯一、

「ウソじゃなかった」というときだけだろう。

ウソじゃなかった、本当に、わたしの未来は豊かになっちゃった、というときだけ、その未来を人質にとつてセックスを迫る卑怯なやり方も、結果的には大赦がいただけるのだ。

とはいえ、赦されようが、赦されまいが、女の側には何の関係もないことなので、これは僕の一種の趣味みたいなものでしかないが……

僕などが、女にセックスをさせてもらおうとすると、「可能性」をダシにして、女の未来を人質に取るしかない。

この構造を眺めて、いやあがんばらなくちゃなあ、と思うとき、一方で、逆側にある、「笑顔で女にすり寄る」というタイプのやり方を、僕はどうしても、好かんなあ、と感じてしまう。

男同士、互いのやり方に口出しする権利なんてないから、どうしようもないし、どうするべきでもないが、女のもう一つの性質である「不要なストレスが大嫌い」というところにつけこんで接近するのは、僕は好かないし、それはやり方というよりやること自体が本末転倒しているように感じる。

笑顔で、安全牌の自己アピールで、すり寄れば、女にとってストレスが少ないから、女はそういった男を拒絶しないが、それは初めから白旗を揚げて突撃しているだけで、本質的にアタックではない。

女が、やむを得ずに残っている善良さにつけこんで接近し、そこからス

トレスの駆け引きでイイコトをしようなどというのは、卑怯さがどうこうというより、結局成功しないし、疲労やコストのダメージが大きすぎる。

女にとっては、ストレスは少ないように見えるけれども、退屈だし、退屈さで時間を磨り潰されるのは、苦しくて、それではストレスの代わりに疲労がたまってしまう。

もし、街に出て、「いいお友達」にしか出会えず、何の可能性にも出会えないとわかりきっているなら、女はもう街に出ること自体をやめるはずだ。退屈な、いいお友達に出会うくらいなら、可能性のある、不愉快な奴に出会うほうが、女にとっては、まだ出歩く価値があるだろう。

男と女が出会って、男が女を口説こうとすると、すぐにセックスの話にならざるを得ないが、このことにはいつも、「身体だけが目的なの？」という疑問がつきまとう。

これについては、最低限、身体だけを目的として、身体だけを重ねた場合、「ずいぶんよかったわ」という結果が残るように、男は努めなくてはならない。

女がそれを、「ずいぶんよかったわ」と認めてくれるというのは、スタミナやテクニクがどうだったというのではなくて、

「何の記憶にも残っていないのだけれど、わたしだぶんあの日から調子がいいの。きつとあの人がよかったのね、どんな人だったか、覚えてはいないんだけど……」

というような状態になることだ。

女が、「身体だけが目的なの？」と、身体を重ねることを不快に思うとき、そこに精神的なものを重ねたりしても、それは不快が増す結果にしかない。

不快な映像に、不快な音声まで付け足したら、より不快になるに決まっているわ、というように付け足した。

女は、最低限、目の前の男が、純粹に身体だけを求めてきて、そのことに落ちていて、身体を重ねるぶんには、この人はまったく悪くないわ、やり方が間違っていないもの、ということを求めている。

それは、タクシー運転手でいえば、どれだけ寡黙でもいいから、ちゃんとした運転で、ちゃんと目的地に届けてよ、と求めていることに近い。

タクシーの乗客としては、目的地に着くまで、考え事をせざりタクシイていたいし、そんなところは、ふつう交友なんて求めていないものだ。

めんどうくさい男と寝たくない、という女の願いは、めんどうくさいタクシーを引きたくない、という女の願いに酷似している。

女にとって、よいタクシイというのは、清潔で、適切だった、というだけだ。気が付けば、目的地に着いていたし、少し休憩ができて、身体が楽になったわ、ありがたう、というのが、よいタクシイだった、ということになる。

男はまず、女に対して、最低限、女と身体を重ねるのに、その意味でのよい男にならなくてはならない。

身体を重ねることさえ、適切に快適にやれないのに、「精神的なもの」なんて、不快になるだけに決まっている。

運転がヘタなタクシードライバーが、やたらおしゃべりだったとき、女にとっては地獄でしかない。

女にとつて、「精神的なもの」は、より重要なものだから、そういったものについては、もっと大切なときに、もっと大切な場所でもっと大切な人と考えるわ、と思っている。

間違っても、目の前のどうでもいい男を相手に、その精神的なものを求めることはありえない。

女は、佳い男と身体を重ねて、すっかりよい心地になり、その男をすっかり忘れていく中で、精神的なものと同じく自分の時間を持ちたいのだ。

そういう時間が持てたとき、女はその、自分に滓（かす）を残さなかった佳い男と佳いセックスについて、素直に感謝するだろう。

女は、ただでさえ、思念と身体が神経上で交錯を起こす、そのわずらわしさに疲れている。

女が男に求めているもの、およびセックスに求めているものは、神経上における、一種の交通整理のようなものだ。

思念のほうを、一旦赤信号にして、身体をのほうを、青信号にする。そうして、信号を正常化して、事故渋滞していたものを、整理してほしいという、ただそれだけなのだ。

そこに、わざわざ男までしゃしゃり出てきて、女に思念を促すようでは、女の神経における事故渋滞は、さらにひどいものになってしまう。

女の思念に口出しをすることは、女の身体に手出しをすることよりはるかにひどいハラスメントだ。

女は、自分の思念を大切にしたいので、それと渋滞を起こす身体をのほうは、できればアウトソーシングで解決したいという気持ちがある。

信頼できる、適切な男に、身体を預けておいて、正常化してもらい、自分自身の思念のほうを、正しく保護して育てたいのだ。

女が、自分の娘を保育園で育てたいというとき、それは男に周辺の治安を守ってほしいということであって、男に娘そのものを育ててほしいということでは、決してない。

言うなれば、女は、或るひとつの「街」に、住んでみたいと思っている。

・交通が整理されていて、渋滞がないの。

・タクシーが、運転上手で、田舎っぽくなく、清潔なの。

・街中に、わたしの知らなかった「可能性」がたくさんあるの。

・それでいて、わたしがどんな本を読んでいるかなんて、誰も詮索してこないの。

こうして、女は、「こんな街があるなんて、知らなかった」という心地に、似たような心地がするとき、目の前の男と、少し付き合ってみてもいいかな、と思う。

男の側は、その街づくりを淡々とすればいいだけで、佳い街というのは気持ちの問題ではなく、ただ品性と街としての性能の問題だ。

男が街だとしたら、男が女を求めて追いかけて回すのは、街が人を呼び込もうとすることと同じだから、やはり当たり前のことだ。人を呼び込まないと、街は廃れる。

そして、中には、「もう人なんか来なくていい」と開き直った街もあるが、そういう街は、察せられるとおり、すでにとんでもないことになっているのだから。

精神的なもの、というのは、人の読んでいる本を詮索したり、「この本を読んだらいいよ」と勧めたりするようなことだから、それこそ、よほど信頼できる誰かとか、女はそんなやりとりをしたがらない。

僕のような男は、生涯、そういったやりとりの相手に、選ばれることはないだろうし、またそういった相手に選ばれたらいいわけではまるでないで、せいぜい、良質なタクシードライバーと同様に、運転を上手にして、身体を重ねることを、良質にやっていたらいいだろう。

僕だって、ほじくれば、ひよっとすると人並み程度の知能や精神性は、あるのかもしれないが、そんなものを持ち出すのが、僕にとつて活躍だとは、露ほども思われない。

女の誰も、そんなことを男に期待していない。

少なくとも僕はそういうことを期待される男ではない。

女は、男に知己を探しているわけではまったくないし、特に僕のような男は、良い知己にするには完全に不向きで、見当違いだ。

女は、整理されて快適な神経の状態と、途絶えることなく現れてくる未来への「可能性」を求めているのであり、そのためになら男の接近を許す心がある。

この男と寝れば、快適に、心身は整理されるし、未来を拡大に向けてやっていけるし、時間もそんなに取られないし……というとき、その男は、女にとつて、意味のある存在になる。

つまり、そういった「生産性の高いセックス」をただ与えてくれるものなら、女は積極的になりえるし、「男は死ぬまで女を求めて追いかけて回す」という男側のことにも、矛盾なく整合がゆく。

生産性の高いセックスのためには、男は、女とおしゃべりなんかするべきではないのだから。

男は、女と、おしゃべりしている場合ではないし、女を選び好みしている場合でもない。

生産性のあるセックスをしているとき意外、男には、何の値打ちもないの

だから、落ち着いて、そちらに身を入れていくしかない。  
 いつかは、誰かと、精神的に交わるといふようなことも、夢に見ないではないけれど……  
 それはあくまで、夢のことであって、それを現実の女に向けるというよう  
 な、失礼なことではない。  
 では、おやすみなさい。

## 運気を上げる方法

経験上、「自分から」、何かをしようとしないう人間は、猛烈に運気を下げていくのだとわかる。

どんな馬鹿げたことでも、「自分から」、何かをしようとする人間は、不思議に、運気を掴んでいくものだ。

最もわかりやすいものには、たとえば年賀状などがある。

年賀状という、しきたりのことはどうでもいいが、多くの人は、「もし送られてきたら、ちゃんと返信はします」と思っている。

それで、社交上は、問題ないのかもしれないが、このやり方は、どうやら運気を猛烈に下げる。

運気を、猛烈に下げることが、別に悪いわけではないが、本当は、そうと知っていたら、そんな運気を下げることが、別にやりたくはないのだろう。

一番いいのは、自分から何かをして、相手から見返りを求めない、相手のことは放っておく、というやり方だ。

それが一番、運気を上昇させる。

相手からの、反応や、見返りを求めると、運気上昇の作用はグッと下がってしまうので、とにかく自分から何かをして、見返りを求めないというのが、どうやら一番いいようだ。

そのことが、なんとなくわかるから、僕は今もこうして、一方的に、自分から誰かに向けて、書き話すようなことをしている。

こんなこと、何の見返りもないし、見返りがなければこそ、安心というか、一番おもしろいのだと知ってやっている。

自分からそうして、見返りなしに、人に向けて何かをする女は、そういうことをしない女より、何十倍も運気がよくなる。

実際、知り合った人には心を込めた手書きの年賀状を送り、返信なんかまるで期待していないという明るい女がいたら、そういう女は運気を非常によくしているだろう。

同じ、彼氏がいるのでも、自分から彼に手書きのラブレターを送ったりとか、自分から手をつないだり、自分からキスをしたり、自分から彼のことをちゃんとイカせてあげたりして、別にそのことに見返りも求めないという女だったら、その女の運気はともいはずだ。

それが、「尽くす」というようなことだと、陰気で、それはまたちよっと違う。

見返りとは何の関係もない、ただ自発的な、自分からの、「こうしてやった」ということなのだ。そのことによって運気が上昇する。

そのほかにも、運気を上昇させるためのコツは、いくつかあって……

たとえば、「戸締りをきちんとする」ということは、運氣の上昇にとてもいいし、「時間を守る」ということも、運氣の上昇にとてもいい。

戸締りをだらしなくすると、防犯上も危険だし、運氣の上でのマイナスもひどいものだ。

時間を守るといのは、守らなくていいような時間を守る、というのがコッだ。

試しに、もし、「この人は運氣が落ちているな」と感じられる人がいたら、その人をどこかの待ち合わせに呼び出してみたらいい。

必ずその人は、時間どおりには来ない。

必ず、二、三分でも、遅刻してくるはずだ。

個人的な待ち合わせに、そんな程度の遅刻は、マナーとしては何の問題でもないが、問題はただ、そうすることが運氣をひどく下げてしまうところにある。

このことは、自分ひとりについても起こる。

朝八時に出よう、と思つたら、なんとかして、八時ちょうどに出ないと、運氣が下がってしまう。

すでに運氣が下がり切った人は、ありとあらゆる行動について、予定時刻から数分遅れたタイミングで行動しているはずだ。

運氣が下がっている人は、だいたいそうして、運氣を低めるほうへ、身体が馴染んでしまう。

僕だって、時間をキチキチ守るような、極端にパンクチュアルなのは苦手だが、それでもどこかで「これはまずい」と感じたときは、とにかく自分で決めた時間どおりに、必ず動くようにしている。

どこかで切り替えないと、運氣がひたすら下がっていくからだ。

ここで話している、運氣というものは、オカルトの世迷言なので、まったくアテにしないでいい。

ただどうやら、ここで僕が運氣と呼んで話していることは、あるていど科学的な説明も可能なようだ。

それはつまり、運氣が下がるというのは、「自分の行動をコントロールできていない」ということを、どうやら指すみたいだからだ。

人間の身体には、どうやらある程度、良いものに自然に気づき、探し当てる、という能力があり、同時に、悪いものに自然に気づき、避ける、という能力があるように思える。

それぐらいの能力は、動物なのだから、あつて不思議ではない。

だが、この能力は、自分が自分によってコントロールされていないときは、発揮されないのだ。

それで、コントロールされていないときは、自然に、自分が物事の良いほうへ寄らず、気づけば悪いことのほうへばかり寄っている、という結果が積み重なってくる。

そのことを、おぼろげに捉えるのに、運氣が悪い、と呼んでいるに過ぎない。

どういふことかという、たとえば、「戸締りはちゃんとしなきゃ」と、誰だつて思つてはいるのだ。

この、「思っている」ということを、自分で裏切る形で、戸締りのだらしなさは発生する。

このとき、脳みそのレベルでは、ある種の学習が起こっている。

それは、「自分の行動は、自分の思ったように行われぬのだ」ということの学習だ。

時間を守らない、ということも同じだ。朝八時に出発し、朝九時に待ち合わせ、という、時間を決めてあるのに、それを守らないとなると、やはり、「自分の行動は、自分の思ったように行われぬのだ」ということが脳みそに学習される。

これによって、認知と行動という、人間の脳のメカニズムが、甘くふやけてしまい、人格の構造が、ガタガタになってしまう。

たとえば、

「よし、がんばるぞ」と思つたとき、その裏側で、自動的に、

(いいえ、わたしはそう思つたけれど、思つたようには、がんばりませぬ)

という発想が起こるように、学習されてしまっている。

これは考えてみると、怖いことであり、つまり、

・思っていることを、やらないし、

・思っていないことを、やる、

という仕組みに、人格が変形していつているのだ。

こうなると、ふとしたときに、意識にまで上がってこない、脳のシグナルが、

「これはいいぞ」と言っているときに、それを取りにいかないということが起こる。

同じく、脳のシグナルが、

「これはまずいぞ」と言っているときに、そこから逃げない、ということが起こってしまうのだ。

別に、それでかまわないという人は、かまわないが、僕などは利己主義者なので、自分が損をすることはたいへんイヤだなあと思う。

そして、運氣を下げる最大のパターンは、「自分から」は何もしない、というタイプだ。

このタイプは、時代的に、とても流行っているように思える。

なぜこのタイプが、最大に運気を下げるとかというところ、それこそだ。それこそ、その「思っていることを、やらない」「思っていないことを、やる」ということの、代表例みたいなものだからだ。

人間、当たり前だが、日々暮らしているうちに、色んなことを思っているものだ。

たとえば、おばあさんが、手荷物を地面にぶちまけてしまったら、

「あ、いけない、拾うのを手伝おうかな」

と思ったりする。

あるいは、駅前ですわっている募金活動なんかにも、

「たまには、寄付ぐらいしようかな」

と思ったりもする。

「最近、あの人どうしているかな、メールしてみようかな」と思ったりもするし、路上で誰かが歌っているのを聴けば、「いい歌だったな、拍手しようかな」と思ったりすることもある。

しかし、多くの人は、周りが拍手をすれば拍手をするが、自分からは、拍手をしようと思わない。

自分から、「拍手したいと思ったので」という動機で、拍手をすることがない。

そうすると、脳みそは、

「はーん、こいつは、自分で思ったことで行動するのではなく、ひたすら、周囲のムードに合わせて行動するだけなんだな」

ということを学習してしまう。

そうなると、もう、「自分から」というメカニズムが人格上で失われていって、「自分から」は何もできない人間になってしまう。

別にそれでもかまわないのだが、そうして人格から自発性を除去されてしまふと、よいものを見つけてもそちらに寄っていくことができないし、悪いものが寄ってきてそこから逃げるのができなくなる。

そして、よいものが向こうから逃げることができなくなるといことは少なく、だいたい、向こうから寄ってくるものは何かしら悪い意図をもって寄ってくるものだ。

そして、なぜかわからないが、中にはそうした運気の悪くなっている人間を見つけて、そこにつけこむのを得意としている人間もいるのであり、つけこまれて、そうこうしているうちに、運気の悪い生き方が出来上がっていつてしまう。

今、この時代のムードの中で、「自分から」ということを、明らかにやっている人は、かなり少ないはずだ。

「自分から」、古めかしく手書きの年賀状を送るようにしたとしても、そのことは表面上、何のメリットも与えてくれないが、その代わり、運気をかなり底上げしてくれている。

「自分から、やろうと思ったから、そうしたの。おかしい？」ということ、それ自体が運気を上げてくれている。

そうして運気を上げていくと、ふとしたとき、ふとしたところに飛び込んで、ふと目の前の誰かの肩を叩きたくなり、「ねえねえ」と肩を叩くと、すごいいい人で、知らぬ間に、すごいいい仲間になっちゃった、ということが起こる。

運気が下がっていると、いつまでもどこかポカーンとして、立ち尽くしており、そんなときに後ろから誰かに「ねえねえ」と肩を叩かれて、悪いことになってしまうものだ。

運気を上げたい人は、なるべく見返りのない「自分から」ということを、どんどんやり、戸締りを励行し、時間を守る行動様式に切り替えるのがいい。だいたい、「自分から」ということができず、「思っていることを、やらなく」「思っていないことを、やる」というような人は、もう目つきや顔つきからして違うものだ。人格がゆるんで、不明瞭な、違和感のある顔になっている。

挨拶をするとき、「おはようございます」と、言われたら、「おはようございます」と、挨拶を返すものだが、このとき、運気がよくなっているのは、先に挨拶を仕掛けてきた側だけだ。

もちろん、挨拶といっても、「こういうふうにしなさい」と、決められているものを、そのままやっただけだ。

それは結局、自分では思っていないことを、慣習的に「やらされている」に過ぎない。

どういうふうな挨拶をするかなんて、人それぞれ、自分が考えて、自分で「こうする」と思って、決めるものだ。

人間なのだから。

この、人間として、「こうする」というのを決めて、そのとおりにするとう、当たり前のことをやっていくだけで、人間の人格本来のメカニズムが回復し、結果、運気がよくなってくる。

男が女を口説くときでもそうだ。

「あまり、好き勝手に口説いたら、相手に迷惑になることもあるだろうし、やめておこう」

というふうな考え、結果的に、「自分から」は動こうとしない人は、良識的で「いい人」と思われるようになるが、実際には、運気をどんどん下げている。それよりは、

「いや、ただ、目の前にいたし、綺麗だから、つい口説こうかなと……キヤラメル食べる？」

というふうな、アホみたいなやつの方が、「自分から」動いているし、「思ったことを、やる」ということに殉じているので、運気がよくなる。



運気の悪い人は、物事を、人から習うのが好きだ。どうしたらいいか、どうするのか、その方法やマナーといったものを、習って、そのとおりにしようとする。

つまり、「自分から」、何かをするというのを避けたがる。

そうすることによって、やはりますます運気を悪くしていく。

運気を悪くする人は、決まって、「思っていることを、やらないし」

「思っていないことを、やる」のだが、これをさらに言うのと、たとえば作り笑顔をしている人なんかも、そのたびに運気を悪くしている。

作り笑顔というのは、笑いたくもないのに、笑い顔をするということだからだ。

まさしく、「思っていないこと」をやっている。

作り笑顔も、クセになると、自動的にやるようになるし、そうしてクセになると人当たりがよくなって、生きていく上では便利に見えるのだが、実際にはその代償に、運気を下げていってしまっている。

逆に、ぶっさらぼうでも、たとえば「あの鳥は何だ？」と思い、立ち止まったり、踏み込んだりする人は運気がよくなる。さらにはそのとき、同じ鳥を見上げているおじさんを見つけて、「あの鳥は、何です？ なんていう鳥？」と厚かましく訊くようなやつだと、そういうやつはとて運気をよくしている。

そんなわけなので、運気を上げる方法というのは、実にシンプルに、次のようにまとめられる。

・戸締りをきちんとする

・時間を守るようにする

・「自分から」ということを途切れさせない

これだけで運気がよい生き方ができるようになるし、また、運気がよくなってくると、人の生き方や考え方なんていくらでも変わってしまうものだ。運気がよくて、幸運が舞い込んでくるばかりの中、どうやって人は暗くならないし、陰気にもならない。

運気というのも、その字のとおり「気」の一つだから、性格的に、それを「気難しく」してしまっただけではない。

気難しくすると、当然、運気のほうもこじれる。

ふつう、運気の悪い人で、すっきりして素直な人だ、という例はまずないものだ。

ごくまれに、運気がひどく悪い人で、すっきりして素直なのに……という人も、ないではないが、そういう人は、戸締りとか時間を守ることとかに、ひどい穴が開いているような暮らし方をしているものだ。

そういう人は、本当に運気を悪くしているの、近づかないように。中には、驚くべきハイペースで、災難を引き込んでしまう人もいるのだ。

あ、あともう一つ、重要なものを足し忘れていた。

・連絡をこまめにする

連絡をこまめにする人も、運気を大きく上昇させる。たとえば、

「宅急便、届きました。ありがとうございます」

というメールを送ったり、

「明日、予定どおり、正午に着けると思っています」

というメールを送ったりだ。

こういう人は運気をよくする。

これは、言い換えてみると、「仕事ができる人」に近似しているところがとてもある。

「仕事のできる彼」の、生活様式は、

・戸締りをきちんとする

・時間を守りを守る

・「自分から」ということを途切れさせない

・連絡をこまめにする

ということであって、まったくおかしくない。

逆に、運気を悪くする人のことを考えてみる。運気を悪くする人は、ちょうど正反対に存在するわけだから、

「鍵かけてなかったわ。まあでも大丈夫っしょ」

「なんか買物しすぎた笑、あと二時間したらいくー」

「結局どうしたらいいの？ わたしでやれることあったらやりませうけど。」

そんなときは指示ください」

「今日って昼からだっけ？ とりあえずそっち向かってます」

こういう人は、いかにも運気を悪くしていそうだし、いかにも、まともな仕事なんかできなさそうだ。

そして、いざ恋あいだとか、お付き合いするとか、単純にデートをするだけだつて、運気の悪い人とはデートなんかしたくないし、まともな仕事ができなさそうな人とは、デートしたつてきつとまともにお話することがない。

誰にだつて、生活様式というのがあるから、その生活様式を、運気のよくなるほうへシフトすれば、運気はよくなるし、その結果きつと、仕事をする上でも有用な人間になれるのじゃないか。

だから、そうしたらいいよ、とは、僕は言わない。

何をしても、「自分から」ということではないと、運気は上がらないからだ。運気を良くする人は、何にだつて「自分から」動いている。

## 自意識過剰など存在しない

自意識過剰、などというものは、この世に存在していない。  
仮に、存在していたとしても、あなたはそんな男と付き合わないのだから、注目する理由がないだろう。

哲学的になるのは、苦しんでいる人がそうなればよいのであって、今からすべてを楽しもうとしている僕や、あなたにとつては、そんなことをする理由はない。

自意識過剰って何？ と問われることがあったら、

「そんなものは存在していない」  
と、あなたは答えればいい。

仮に、もし、あなたが僕の目の前で、自意識過剰だったとしたら、そのときは僕は、あなたのことをまったく見ないので、何の問題もないだろう。

自意識過剰であるのが、なかるうが、注文した上カルビの値段が変わるわけではない。

自意識過剰な人が、もしいたら、自意識過剰のまま、一生を生きればいい。そんなことを、していても、していなくても、時間はアツという間に過ぎ去っていく。

自意識過剰のどうたらなんて、どうせすぐ忘れるのだから、そうして忘れろと決まっているものを、わざわざ考えたり覚えたり努力する必要はない。

自意識過剰に対する唯一の特効薬なんて、拳で本気で脇腹を殴ってやるぐらいだ。

自意識過剰が、あろうが、なかるうが、脇腹は平等に存在しているから。拳で、本気で、脇腹を殴られる覚悟をするというのは、女にとつては、男に抱かれるということと、まったく同じの覚悟だろうと想像する。

それは、身体に向けて、好き勝手をされるということから、同じだ。

自意識過剰の行き着くところは、どこかというところ、神経が頭で破裂しちゃうことになる、でも破裂しない、たまたまなく不快で……そのことを繰り返す、というだけだ。

それはまるで、はるか彼方で起こっているどこか天空の恒星の、フレア爆発みたいなものだから、放っておいてよいし、影響はないし、そもそも口出しも手出しもできない。

手を出せる先は脇腹だけだ。

僕があなたの脇腹をブン殴ろうとするとき、あなたにできることは、あきらめて受け入れるか、逃げるか、そのどちらかだけだ。

逃げられた場合は、僕は追いかけるし、追いかけるなら恐怖だろう。こう言うと、常識的には、百パーセントすべての女が、逃げそうなもの

が、事実はそうではなかった。

事実は、おそろしいもので、女のほうが震えながらも「どうぞ」と、弱い脇腹を、あざを作るために差し出すことのほうが、むしろ多かった。

それぐらい、女にとつて、身体は大事だ。

女にとつて、身体がちゃんとくねくね動くということは、頭に神経のフレア爆発を起こすような馬鹿げたことより、命がけで大切な、ということだったのだろう。

あまりの痛みに、カツとなって、あなたが僕の頬を全力で平手打ちすると、せめて僕は、それから逃げたりすることはないとだけ宣言しておきたい。

確かに、それぐらいはせめて覚悟しないと、身体がくねくね動いてくれたりはしない。

弱い脇腹に、拳が打ち込まれて、ウグーと苦しい悲鳴が挙がる時、胸は痛むが、そうして身体がくねくね動き始めるとき、その悲鳴は汚らしくはない。

あなたは、そんな痛みなんかより、自分が自意識過剰から神経ヒステリーの悲鳴を上げたときに、自分の頭蓋骨から汚らしい汗が出るということ、耐えがたく思うのだろう。

そのところの覚悟が、やはり、女だな、男とは違うな、と感じられて、僕は畏怖する。

僕があなたに向けて何をやるか？

僕があなたに向けて何をしているか？

そのことにあなたは心を向けているか？

脇腹へ、拳が、あと何発、打ち込まれるのか。それが、必要性におけるものなのか、あるいは、すでに必要分を上回って、歓喜か、官能か、欲情のためにそうするものか、その打ち込まれる具合を、ちゃんと見ようと震えている。

僕だって、そのとき、すでに赤く血を浮かしているあなたの脇腹が、これ以上やると重傷になるかどうか、またあなたの眼差しが、どこまで僕のことを見ているか、あなたが何を感じているか、あなたの汗が官能と恐怖のそれであり、それ以上の苦しさを示すものではないかを、慎重に見ている。

だから、僕はあなたを見ながら、あなたを殴っているし、あなたは僕を見ながら、その脇腹を殴られている。

お互いをちゃんと見ながら、それをしてる。

ちゃんと見ながらでない、危険なことだし、ちゃんと見ながらでない、傷つけてしまうからだ。

そうして、お互いのことを、本当にちゃんと見ているとき、初めて、人間は自意識過剰とか、自尊心とか、自己中心性とか、自己愛とか、そういったものから離脱できる。

ただそれだけのためにだ。  
つまらない人間は、目の前の人をちゃんと見ず、自分のことばかりを見て  
いる。

だから、人を傷つけてしまう。

そういうつまらないことだけは、僕はしたくない。

あなたもしたくないはずだ。

どうして、お互いのことを、ちゃんと見、ちゃんと感じ取らないのだら  
う？

すでに痛みから涙を流しているあなたの、赤い脇腹を打つのも、やがて十  
分に役目を果たして、いつかは終わる。

あなたが、自分のことを見るすべてをやめて、まっすぐに僕のことだけを  
見るようになったら、その眼差しにおいて、もう脇腹を打つのは終わる。

あなたが、自分のことを見るのをやめて、僕のことをまっすぐ見、ちゃん  
と僕とあなたの間で、あなたの身体がぐねぐね動くようになったとき、もう  
あなたの脇腹を痛めつける必要はなくなる。

そうしたとき、お互いに、「やっつと……」という心地で、安息できるだろ  
う。

願わくは、もしできるならば、そうしたことが、脇腹を拳で打つたりする  
前に、ちゃんと成り立っていてくれたらと思う。

そうしたら、もう、初めから、あなたのか弱い、もともとはちゃんと白く  
て綺麗な脇腹を、殴って血を浮かせたりしなくて済む。

初めから、あなたが、自分のことを見る一切をやめて、僕のことだけを見  
てくれたら、僕はもう、拳を用意さえしなくて済む。

まだ、脇腹に、血の味と痛みを残したまま、あなたがまた明日へ向かうと  
して、明日からのあなたが、なお痛みを残したまま、自分のことなど見るの  
をやめて、世界のことを、目の前に現れる人たちのことを、まっすぐに見る  
ようになったら、そのときあなたははずつとうつくしいだろう。

そうしたときから、あなたの生であって、そうしたことの方が、あな  
たの利益だ、なんて言い方するのは、ヘンかな。

いずれ、その先、今度はより洗練されてくねくねと動くようになった身体  
を、また僕に見せに来てください。

## レベルアップの構造と、八つの注意点

まず冒頭に、まったく関係ない話をする、僕は、何でもなし話をしてい  
て、ふと気づくといつの間にか、隣にいた女の子が温まっていて、すっかり  
その気になってくれている。「あ、口説く手間が省けた、じゃあ行っちゃお  
うか」となって、一番手軽に（という言い方はひどいが）ハッピーエンドに  
なるというのが、一番好きだ。なんというか、ラクなのもあるし、それより  
も、それはとてもナチュラルなことを受けて、好きなのだった。口説くぞ！  
と思っただけというやり方は、やるけれど、あまり好きではない。口説い  
たら落ちるのは当たり前前に決まっている。というのはもちろんウソだが、女  
の子も口説かれてばかりでは飽きるだろうから、何かもっと別の話を聞いて  
いて、それでいつの間にか「あれ？」となって、温まってしまっている、ど  
うしましょう、もちろんやってしまいましょ、というのが、女の子にとつ  
ても一番ハッピーではないのだろうか。

ある女の子が、「おしゃべりになりたい」というので、それについて僕は少  
し話したが、そのときに話したことが一番わかりやすいと思うので、そのと  
きに話したことを、そのままここにも書き話す。

大事なのは「レベルの差」なんだ、ということと話した。そのことはもち  
ろん、「ハイレベルのもの、一流のものに、たくさん触れてみようね」とい  
うことも含まれている。が、ハイレベルのものに触れて「ではがんばりま  
しょう」ということで、全てがすんなりいいたら、こんなにラクな話もない  
なかな、そうはいかないから厄介なのだ。僕がそのとき話したのは、「レ  
ベルの差」こそが一番大事だということだった。「方法」なんか探しても  
しようがないし、「経験」ということも、もっともらしく聞こえるだけで、  
本当は言い訳にならない。方法なんか誰でも同じで、経験なんてやたらに増  
やしてもしょうがない。方法も同じなら経験も似たようなもので、違うのは  
ただ「レベル差」なんだ、と話した。同じことを同じ方法でやっているのだ  
が、ただレベル差があるから、まったく違うレベルのことが起きる。ただそ  
れだけなんだ、ということだった。

大事なのは「ハイレベルになること」ではなく、まず「レベル差」なのだ  
と話した。「レベル差」をはっきり見ることだ。わかりやすく言うところな  
ら。

——あなたは、十人で集合写真を撮ったとき、「このコが明らかに一番オ  
シヤレだね、かわいい」と、はっきり認めさせるといふ自信があるだろ  
うか？

こう考えると、どんな物事も、実はとても難しいじゃないか、ということ  
が明らかになる。

もう、全てを投げ出して、酒を飲んで寝てしまいたくなるほどだ。レベルの差というのは、生々しくて、なかなかイヤになるものがある。たとえば、「中学のときは、なかなか成績がよかったのよ、わたし」という人は、今ここにも少なからずいると思う。が、「成績はクラスでトップでしたね」という人は、そんなにたくさんいないはずだ。

ここが、レベルの問題、ということになってくる。

これはとってもイヤな話なのだ。

つまり、中学校で期末テストがあったとしてだ。

そのテストで、良い点を獲るとか、良い成績を出すとかいうことは、そんなに難しくもないのだ。

ところがそのテストで、クラスで一位になる、というのは、単に良い成績を獲るといふこと、何倍も難しくなってしまう。

クラスで一位になるといふことは、単に良い成績を出すといふことの、五倍難しいと考えていい。

なぜか？

それは簡単に数字で説明がつく。

「良い成績」と言える人は、クラス内にいたい五人ぐらいはいるからだ。その五人の中で、トップを獲らなければ、クラスで一位にはなれない。

だから、「クラスで一位になる」といふことは、単に「良い成績を獲る」といふことの、五倍難しい。

そして、学年で一位になるとすると、今度はまた、クラスで一位になることの五倍難しい。

これも当たり前だ。

だいたい、クラスは一組から五組ぐらいまであるからだ。

これがレベルの差であつて、実は単に「良い成績」といふのと、「学年でトップ」といふのとでは、計算上、その難しさに二十五倍の格差があるといふことなのだ。

これとはとても憂鬱な話で、とってもイヤな話なのだが、逃げられるようなことではないので、舌を出しながらでも頑張つて受け止めるしかない。

みんな、頑張ろう。

誰だって、同じ生きるなら、何か抜群の男、何か抜群の女として、生きていと思つていないに違いない。

その「抜群」といふのは、群を抜いている、という意味だ。

そして、その「群」といふやつ。

この「群」といふのが、レベル、ということだ。

レベルアップする、ということとは、群を抜く、ということだ。

もう一度、十人で集合写真を撮つたとする。

その中で、一人だけ、

「このコ、群を抜いているよね。群を抜いてかわいい」

「周りのコとは、比べ物にならないよ」

というような存在になるということ。

つまり、周囲の群とは、同レベルにない、ということ。

それがレベルの差、ということだ。

なかなかキツイ話なのだが、このことは、ごまかしようがないのでしようがない。

同レベルでは、群を抜いていないので、「抜群」ではない。

群を抜く、ということの、なんと難しいことだろうか？

レベルアップといふのは、そういうことなのだ。

レベルアップといふのは、よく聞くと、「レベルアップしたい」とは誰しも思うのだが、レベルアップといふのは、実はひとつひとつ、それぐらいキツくて難しいものなのだ。

なぜ、レベルアップするといふこと、「群を抜く」といふことは、そんなにも難しいのか？

それは、決して忘れてはならないこと、

「周りも努力する」

からだ。

仮に周りの全員が、チンパンジーかゴリラであつて、おしやれは一切しないし、勉強も一切しない、ウホウホ、という状態なら、その中から群を抜くことは難しくもない。

ちよこつと努力すれば、すぐに頭角を現し、群を抜くことができるだろう。が、現実にはそうではなく、周りのみんなだつて、少なからず努力をする。

だからこそ、その中で頭角を現し、群を抜くといふことは難しいのだ。

周りのみんなも努力するということ。

その、周りのみんなが当たり前にする努力のことを、

「並大抵の努力」

といふ。

並の人が、たいていこれぐらいの努力をします、ということだから、それを「並大抵」といふのだ。

この、並大抵の努力をする群の中から、群を抜いて頭角を現そうとすると、それはやはり、「並大抵の努力では足りない」といふことになる。

このあたり、日本語はよくできていふのだ。

「抜群の女になるには、並大抵の努力では足りないよ」

と言われたら、日本語の中にちゃんとそのことが全部書き込まれている。

仮に、世界中の人口が七十億だつたとして、その七十億のうち、70人の、いわゆるスーパー・モデルがいたとする。

すると、このスーパー・モデルといふのは、単純な倍率として、一億人に

一人の「おしやれ」といふことになる。

それはとても華やかなもので、女の子にとっては憧れの的だ。が、そのことを見て、気分を高揚させても、それだけでは何にもならない。なぜなら、自分の方かというと、十人で撮った集合写真の中でも群を抜く自信がない、という状態だからだ。

十人に一人、ということにも、まだまだなれないという状態にある。こういうことは、考えるのもイヤなものだが、事実なのでどうしようもない。

十人に一人、ということにもなれていない、というのが現在の自分がいる「レベル」だ。

その自分と、スーパー・モデルを見比べたとき。

「やっぱり、プロポーションが違うなあ」とか、「やっぱ違う、自信に満ち溢れているもの」とか、「歩き方が違う」とか、そういうことを見ていても、実はあまり意味がない。

真っ先に見て、受け止めなくてはならないのは、そのレベル差のことなのだ。

スーパー・モデルのレベルと自分のレベルを、レベル差において比較したとき、計算上、冗談みたいに聞こえるが、そのレベル差は一千万倍以上あるということになってしまう。

だって、相手は、一億人に一人のレベルなのだ。

十人に一人というレベルにさえ到達していない自分と、本来は比べること自体がおかしい。

あるいは、たとえばこう考えてみよう。

ここに、百メートルを16秒で走る少年がいたとする。

その少年と、世界最速の短距離走者とで、どれだけの差があるか？

「えーっと、6・5秒ぐらいかな？」

という、そっちの計算をしてはいけけない。

「仮に、二人に一人は16秒で走れるとしたら、向こうは七十億人に一人のレベルだから、レベル差は三十五億倍だなあ」

と、そっちの計算をしなくてはならない。

百メートル走なんて、典型的にそういうものだ。

言葉どおり、全員でスタートして、「群を抜いて」ゴールする人、それが優秀な短距離走者なのだから。

非常に厳しい、憂鬱なところの話だが、このことは誰だって、ごまかさず受け止めていかなくてはならない。

なぜ、ごまかさず受け止めないといけないかというと……

この「レベル差」をごまかしていると、当たり前だが、いつまでたっても「レベルアップ」ができないからだ。

自分のレベルと、目指すべきところのレベルの、レベル差から目を背けていると、レベルそのものから目を背けてしまうので、レベルアップができない

くなる。

すると、努力しているつもりで、実はレベルアップする可能性のない、閉じた努力に耽っているという状態に、いつの間にかなってしまふ。

それでは努力するだけ損だ。

どれだけ努力してもレベルアップしないなんて、それでは努力の無駄遣いだ。

努力をすると、何かしら向上した感じがするし、あるいは改善した感じがする。

けれども、「改善しました」と言いながら、実は同じレベル内のまま、改善、したのかな？ というような程度の、あいまいな改善ごっこしかしていないかったということ、けっこうよくあることだ。

そんなことに、自分から向かうべきではなくて、自分から何かを努力するなら努力するで、はっきりとレベル差を認識し、「今自分のいる、群を抜くんだ」「レベルアップするんだ」ということへ、堂々と向かわないといけ

ない。

もつとえげつなく言うと、今肩を並べている誰かと、「比べ物にならない」というところに、数年後には到達してみせようということ。

これは、えげつなく聞こえるけれど、堂々とそういうつもりでいていいのだ。

なぜなら、向こうだって堂々と、「群を抜いてみせる」「レベルアップしてみせる」と思って努力をしているはずだから。

そうして友人同士、いつの間にか、揃ってレベルアップしていたら、それが何よりだ。

レベル差ということには、色んな考え方があ

た。たとえばあなたが女性だったとして、あなたの目の前に百人の男性がいた

として。

あなたはその百人全員に対して、「別に誰とだって恋人になっていい」と思うだろうか。

そんなことはきつくないと思う。

男性が百人いたとしても、自分の恋人ということになると、急に選定が厳しくな

って、その中から、候補は五人ぐらい、あるいは二人か三人ぐらいかな、ということにもなるのではないだろうか。

あるいはもつと単純に、百人の男性のうち、恋人にしたいのは一人だけしかいないかもしれない。

ということだ。

もし僕が、あなたの恋人になりたいと思ったとき、どういふふう

に努力すればいいか。

服装を整えたり、髪型を整えたり、あなたに花束を贈ったりとか、そういうことも、もちろん決して悪くない。

でもそうじゃなくて、根本的に必要なことは、僕がその「百人に一人」になることじゃないか。

そうでなければ、あれこれ小手先を工夫したって、あなたは結局僕のことを恋人に選んではくれない。

僕が小手先の小細工ばかりをして、あなたの恋人になりたいと望んだとしたら、あなたはそのとき内心で、

（ごめんなさい、でもあなたはわたしにとって、恋人とか、そういうレベルの人じゃないのよ）

と思っっているだろう。

レベル差というのはそういうものだ。

だからこそ、そのレベル差そのものをはつきり見て、その上で努力するのなら努力しないといけない。

レベル差ということをはつきり見ず、目を背けていると、レベルアップしないどころか、知らないうちにレベルはどんどん下がっていったということにもなりうる。

レベル差を見ないでいると、レベルが停滞するのではなく、レベルは下がっていくのだ。

なぜか？

それはたとえはこう考えればわかる。

十歳のとき、算数ができなかった。それはまだわかるし、そういう人も少なくない。

二十歳のとき、算数ができなかった。それはちよつとまずいというか、かなりのおバカさんだね、という扱いになる。

三十歳のとき、算数ができなかった。こうなると、これはもう、「この人って今までどうやって生きてきたの？」というレベルになる。

先に言ったように、自分だけでなく、周りのみんなも努力しているのだ。

「並大抵」の努力だが、それだつて決して少ない努力量じゃない。

周りのみんなも、少なからず努力しているから、時間の経過と共に、全体の平均レベルは当然に上昇している。

それで、その上昇に取り残されると、相対的に自分はレベルダウンしたことになるのだ。

だからうかうかしてられない。

みんな一日に二十四時間を与えられていて、与えられている時間は平等だ。取り残されず、レベルダウンせず、ちゃんと努力している人は、この二十四時間をちゃんと目いっぱい努力しながら生きている。

それについていくことだつて、決して楽なことじゃない、大変なことだ。そこからさらに群を抜いて、レベルアップしていくなんて、まさしく並大抵のことじゃない。

一日に二十四時間があつたとして、その中でレベルアップしていく人、

「群を抜いていく人」というのは、どういうふうになっているのだろうか？  
一日が二十四時間だというのは、誰にとつても同じだ。この数字は増やしようがない。

けれどもきつと、群を抜いてレベルアップしていく人というのは、この二十四時間の中身を、三倍にも四倍にも濃くして生きている。人の三倍動きまわつて、人の三倍耳を澄ませ、人の三倍物事を見て、人の三倍何かを感じ取っている。そうして二十四時間を生きている。気を抜かず、集中力を切らず、すぐにくたびれたがる自分を甘やかさない。

「レベルアップ」というのはそういうものだ。だからレベルアップする人は、普段の生活から何か身体に纏っている気配が違う。

\*\*\*

ここからもうひとつ、さらにイヤな話になるけれど、厳しい話が続いてしまう。

これはしようがないことなのだ。

レベルアップということは、一般に思われているような簡単なことではなく、それ自体がとつとも厳しいものだからだ。

厳しい話だから、このことは、飲みこんで消化するには、しばらく時間が掛かるかもしれない。

けれどちゃんと落ちて聞いてもらえれば、これはおかしな話でも何でもない、考えてみれば誰にだつて当たり前の話であるはずだ。

まず、

「向上心と、自尊心は、まったく違うものなんだ」ということを頭に入れておくのがいい。

自尊心はむしろ、向上心に対して逆向きにはたらく、と思つておいてもよいぐらいだ。

「自尊心の高い人」は、自尊心が高ければ高いほど、なぜか自己を向上させられなくなる。

なんとなく、そういう人がいることに、誰だつて心当たりがあるはずだ。

「あの人、プライドが高いから、きつとうまくいかないし、成長できないんだらうな」

と、他人事なら、なんとなくそういう気がすると直観で感じることもあるはずだ。

あるいはこう考えてみてもいい。

「向上しない人、向上しようとしなない人は、自尊心がないから、プライドを傷つけられて怒ったりとか、そういうことはゼロなのか」

そう考えたとき、「そんなことはない」ということがわかるはずだ。

むしろ向上しない人のほうこそ、実は内面でプライドが高く、プライドを傷つけられるとすごく怒る、傷つく、不機嫌になる、ということがあらずだ。

ではなぜ、自尊心が高いと、自己は向上できなくなるのだろうか。

このことの理由が、さっきから話している、レベル差というところにある。向上心とか、自分を向上させることというのは、言わずもがな「レベルアップする」ということだ。

そして先ほど話したように、自分をレベルアップさせるには、まずレベル差そのものをはつきり見ないといけない、ということだった。

ここで。

自尊心の高い人は、そのことがまずできないのだ。

自尊心が高い人は、自分が低いレベルにいるということを、心理的にどうしても受け入れられないという状態にある。

だから、自分の低いレベルを見て、目指すところの高いレベルを見上げ、その差を引き受けるということが心理的にできないのだ。

自尊心の高い人にとっては、自分が「平凡」であるということは、耐えがたい恐怖だし、耐えがたい不服なので、どうしてもそのことに目を背けてしまう。

何の努力するにしても、まず自分の今いるレベルについて、

「十人に一人、というレベルでもない」

「十人並み」

「どこにでもいる、平凡なレベルの人」

ということが、どうしても受け入れられない。

これは自尊心の高くない人にとってはよくわからないことだ。

自尊心の高くない、むしろ自尊心の低い人にとっては、

「？ そりゃまあ、自分はフツウの奴だから、フツウのレベルでよかったよし頑張るぞ、って思うけれど……」

という感じで、「？」としか思えないのだけれど、自尊心の高い人にとつてはそうはいかない。

自尊心の高い人は、「自分はまだ平凡なんだ」ということを、何とか苦心して受け入れようとするのだが、どうしてもそれを受け入れ切ることができない。

自分のレベルについて、平凡なんだ、十人に一人というレベルでさえまだないんだということを、「理解」はできても「受け入れる」ということができない。

どれだけ受け入れたつもりでいても、内心にはどうしても「不服」という

感触が残っている。

自尊心というのはそういうものだ。

自尊心の高い人は、何であれ、「自分は絶対に、平凡であるはずがない」「平凡だなんて許せない」「自分は絶対に前もって他人より優れているはずだ」と思い込んでいる。

そうして、何であれ自分は「平凡」ではないんだ、優越しているんだ、と思いつくことを、長い間自分のアイデンティティにしているの、その優越感を取り払ってしまつては、もう自分を保てなくなる。

「平凡」というのは本来、何も悪いことではないのだけれど……  
そもそも、良くもなければ別に悪くもないということを「平凡」と言うのだった。

けれども、自尊心の高い人にとっては、「平凡」は心理的にほとんど禁句のようになっていく。

自尊心の高くない人に、「平凡」と言うと、

「そりゃあ」

と当たり前のように聞こえている。

そして、

「とはいえ、何もかも平凡のままでは、楽しく生きていけないからね。こんなおれでも何かしてやるよ、まあ見てろよ、楽しみにしてなつて」と、不遜というのも、こういう形でたくましく出てくる。

自尊心の高い人に、「平凡」と言つたら、もうその時点でだめだ。

それをどう受け取るかということの前に、まず真つ先に「傷つく」ということが起こつてしまう。

このことによくよく注意して、自尊心が高いと自分で思われる人は、自分のことをよく観察しないとイケない。

典型的に、「このことに気をつけて」と、注意しておくべきことがある。

それは、

「努力をするのに、心理的に大きくなる」

ということだ。

このことは、本当にタチが悪いから、気をつけたいとイケない。

「努力をするのに、心理的に大きくなる」ということ。

なぜそんなことになるかという、こうだ。

自尊心の低い人にとっては、レベル差に向き合うことは、「当たり前」のことだが、自尊心の高い人にとっては、レベル差に向き合うことは、心理的に脅かされる「大ごと」だからだ。

誰だって、平凡なレベルから始まつて、レベルアップを目指すのだけれど、自尊心の高い人にとっては、自分が「平凡なレベル」ということ自体が「大ごと」なのだ。

だから、ただ単にレベルアップへの努力をする、ということが淡々とでき

ず、努力を一つするといっただけで、心理的に「大げさ」になってしまふ。たとえばこんなことがあったでしょう。

あなたが、歌を上手になりたいと思ひ、そういうスクールに通つたとする。それで、スクールに行つてみたところ、先生に、

「うーん、ずいぶん声が小さいわね」と言われたとする。

そのとき、自尊心の低い人なら、

「はあ、やっぱりこれは、向いていないですかね。やる気はすごくあるつもりなんです」

と、きよとんとした感じになる。

ところが自尊心の高い人だと、

「うーん、その、今日は特に調子が悪いのもあって」

「あと、家の教育方針で、大きい声を出すとか、よく言われて育つたんで」

「その、正しい発声を習う前から、大きい声を出して、変なクセをつけたくないなと思つていて」

と何かと騒がしい感じになる。

自尊心の高い人にとっては、何であれ自分のレベルのことを、平凡あるいはそれ以下と言われることは、心理的に大ピンチで、ひどいストレスになるのだ。

その後、自尊心の高い人は、気持ちの向きようになっては、大きい声を出すように、躍起になって練習をするかもしれない。

そのことはよく「コンプレックスをバネにして」とか、「見返してやろう、という気持ちで」とか言われる。

ところがだ。

この躍起になった努力は、残念ながらまず報われず、実を結ばない。

躍起になって練習すると、何か改善したような感じにはなるのだが、よくよく見ると、なぜかレベルアップはしていない。

なぜレベルアップしないか？

それは先に言ったように、レベルアップというのは、まず「レベル差をはつきり見て」、そのレベル差を引き受けた上でのみ成り立つことだからだ。

自尊心の低い人の場合、「声が小さい」と言われたら、「なるほど、確かに」としか思わない。

そして「いっちょよ、やってみますか」ということで、気軽に、習つたとおり大きく声を出す発声方法を練習する。

このとき、「気軽に」というところがポイントだ。

自尊心の低い人にとって、レベル差を引き受けてレベルアップのための努力をするということは、何も心理的に大きなことではないので、大げさにはならない。

これが、自尊心の高い人の場合はそうはいかない。

「ずいぶん声が小さいわね」と、レベルの低さを言われたことよって、心理的に脅かされ慌てて、強引に自分をそのレベルを高いところに持ち込もうとする。

そうして心理的に脅かされ、慌てているから、努力は心理的に大げさになり、それによつてすでに身体はガチガチに力が入つてしまつてゐる。

心理的な大ピンチの中、大慌てで駆り立てられてそれをやつてゐるものだから、身体がガチガチになり頭はカッカしてしまふのだ。

そして、頭はカッカしてゐるので、正しい判断や発想は頭に出てこないし、身体はガチガチなので、身につけるべき新しい声の出し方も身につけてくれない。

このようにして、正しく向き合っていない努力をすると、この場合、正しく大きな声が出るようにはならず、「やかましい声」が出るようになってしまふ。

頭がカッカして、身体がガチガチになって、それでも躍起になって大きな声を出そうとしたら、それは「やかましい声」が出てしまふだろう。

大きく響く声ではなく、ただ「やかましい声」なら、それは誰だつてやけくそになれば出るもので、元々の「大きい声を出す」ということに向けてレベルアップはしていないということになる。

こうして、自尊心の高い人というのは、努力が空回りしレベルアップに向かえないのだ。

誰よりも切実に向上を求めているのに、向上は与えられない。

このことについて注意しておくべきことは、次のように、簡単にまとめられる。

### 1. 努力をするとき、心理的に大げさになっていないか

本来、心理的に大げさな努力をするというのは、もつとハイレベルな人がやることだ。声が小さいのを大きくする、というような、最も低レベルのことを努力するのに、心理的に大げさになるのはいかにもおかしい。どうして淡々と、落ち着いて、集中して、やれないのか。冷静に見てみると、取り組みはまだ低レベルなものであつて、大げさになるべきような大層なことは何一つやつていない。

そうして、心の力が、実は努力ではなく自尊心のピンチやその保護に向かつてゐるとき、力が逸れているので、努力は実を結ばない。だからこそ、心理的な「大げさ」によつて、頭がカッカしてゐないか、身体がガチガチではないか、ということに気を配らなくてはならない。

頭がカッカすること、および身体がガチガチになるということは、自分のレベル、「十人並み」を受け入れるまで除去されない。覚えておくべきことは、「平凡」は「悪い」ということではないということだ。多くの人が、



ちゃんと「平凡」で生きているのに、自分だけ「平凡はイヤ」と横暴なわがままを言うべきではない。誰でも「平凡」というスタートラインからスタートする。自分だけスタートラインを格上げしてほしいというのはひどく不正の精神だ。

「心理的なサイズ」が、「努力とレベルのサイズ」に合っていないとき、それは「大げさ」となる。そのときは、サイズが食い違っている以上、空回りし、努力は実を結ばない。とても大きな努力をするという思いはあるのだが、むしろその思い入れの「大きな努力」こそ、サイズ違いだから空回りする。平凡な人間は、大きな努力などまだできないから平凡な人間なのだ。

どうして、自分ごとき凡人が、「大きな努力」などというものを、本当にやれるはずがあるだろうか？ どこでそんなことを勝手に思い込んだのか。自分ごときの努力など、小さくみてみ始めであって当たり前だ。努力に向かうこと、および、「努力をした」というそのことにも、過大な評価を与えないことだ。努力はもとともみじめなものだ。自分の努力について、後にも先にも大げさな評価を与えてはいけない。

## 2. 努力に高揚していないか

「努力」というのは本来つまらないものだ。つまらないからこそ、努力はおっくうで、そのつまらないことに没頭できる人こそ、根性があつて、集中力があるとされる。努力はあくまでつまらないからこそ努力であり、楽しくなったり、高揚したりすればそれは努力ではない。もし努力が楽しいものだったらそんなものは誰だって出来てしまう。誰だって出来てしまうことで、どうやって「群を抜く」ことができるだろうか？ 高揚するというやり方で努力のみじめさや厳しさから逃げてはいけない。

高揚というのも「大げさ」の一つに入る。「努力する自分」ということへの過大評価がある。周りのみんなも努力しているのに。努力するのは人間として当たり前のことであつて、自負にして誇るほどのことではないし、たかが「努力」ごときで高揚するのはおかしいことだ。ただし、「三昧」といつて、努力に完全に没頭したとき、自意識の全てを忘れて「一つのことが全くなつた」という歓喜はある。しかしこの歓喜は落ち着いたものだから、高揚したり興奮したりするやり方は歓喜のそれとは別のものだ。

自尊心の高い人はしばしば、「ハイレベル願望」によって高揚し、その高揚をモチベーションにする、というやり方を、習慣化したクセにしている。ハイレベルなことを思い描いたり、それについて吹聴したりしているとき、自分の現在所属している低いレベルのことを忘れることができ、そこから最も完全に目を背けることができ、自尊心が満悦する。けれどもこのとき、肝心の「レベル差」の認知からは最も遠ざかっているから、その高揚から得たモチベーションでは努力は実を結ばない。ハイレベル願望によって気持ち浮き立つほど、自分の現在いる低レベルからは足が浮いており、足が浮い

ている以上、その努力は現在のレベル向上に噛み合っていない。

どんな豪邸を建てるつもりでも、その「建設作業」そのものは、見たくもないような汗まみれの苦役に満ちている。苦役に満ちていない建設ならそれは手抜き工事であり、手抜き工事なら豪邸は後に倒壊するだけだ。そうして、向き合うほど「高揚」など遠のき、苦役の果てしなさに青ざめてしまうようなもの、それこそが本当の「努力」だ。ただし努力は決して完全無欠の憂鬱などではなく、「三昧」に到達したときには特別の救済が得られる。

## 3. 他人の努力を忘れていないか

レベルアップしようとするとき、具体的には、自分よりもレベルの高い誰かを目の前にして、学んだり、教わったり、習ったりすることが多い。そのとき、自尊心の高い人は、心理的に脅かされるものもあり、「努力しよう」と躍起になるばかりで、目の前の人がしてきたであろう努力のことをすっかり忘れる。

レベルアップに必要なことは、自尊心に囚われず、大げさにならず、つまらなくおっくうに思える努力に没頭し、落ち着いて清潔な集中力の状態に、長い間入り込み続けることだ。そして、目の前の誰かから、何かを教わって習おうとするとき、その目の前の人こそ、「そうした努力を突破してきた実物の人なのだ」ということを忘れてはならない。自尊心の高い人は、自分が努力をするという高揚感ばかりで一杯になり、目の前にいるせつかくの「努力そのもの」の見本を忘れる。自尊心の高い人は往々にして、自分のささやかな努力には最重要の尊重を向け、目の前の誰かの努力についてはわずかの尊重の心も向けないから、そのことに気をつけねばならない。目の前にある「努力そのもの」の実物さえ見落としているような状態では、自分の努力など到底おぼつかない。

他人の努力を忘れたとき、結局は、自分も努力ができなくなる。なぜなら、努力するという思いがいくらあつても、「何を努力すればいいか？」ということが結局わからないからだ。目の前に、大きくよく響く声を出す人があつたとき、その人は、大きくよく響く声と共に、「努力の成果」をそこに出していると言える。学ぶ者は、その目の前にある、努力を突破してきた身体から、「努力の結果、身体がこう動くようになり」「そしてこういう声が出てくるのだ」ということを知る。この、「努力そのもの」の実物をよくよく感じ取っておかねば、いざ自分が努力しようとするとき、努力しようとする「思い」しか持っておらず、努力すべき「それ」を記憶に残していない。

「思いだけ持って帰る」というのは自尊心の高い人がやりがちな、自分の気持ちが全てだと思つている、具体性のない混乱のやり方だ。人が誰かから何かを学ぶとき、その「努力そのもの」を受け取った程度以上には、決して努力が進行することはありえない。それはまるで、厨房を見ずに料理だけ食べて帰ってきて、「料理を習ってきた」と言い張るようなも

のだからだ。厨房を見ていない以上、どんなフライパンをどう使って料理を作ったか、その人は見てきていない。だからいざ自分が台所に立って努力しようとしたとき、「何を努力すればいいか？」がわからない。

より厳しく言えば、自尊心の高い人には、常に「自分のことしか見ていない」という特徴がある。いわゆる自意識過剰や、自己愛、自己中心性というものと同じようなもので、それらの全ては「自分のことしか見ていない」ということに尽きる。自分のことしか見ていないので、努力しようという「自分の思い」だけがよく見えており、それだけが全てになってしまふ。「努力そのもの」の見本が何をどのようにしていたのかはまるで見ていないので、具体的に努力といってもその方法がわからなくなる。

レベルアップのためには、「レベル差」がはっきり見えていなくてはならない。自分のことしか見ていない、という状態では、レベル差を感じ取るべき対象が存在していない。目の前にある「努力そのもの」をこそよく見て、そこで自分とのレベル差をはっきり見えない限り、レベルアップはできないだろう。レベル差の対象が、せめて「目に焼き付く」という程度でないと、どうしてそれを模倣することができよう？ 自分の思いが自分に焼き付くことは心を大げさにするだけでまったく実用的でない。

#### 4. 方法に疑問が混入していないか

低いレベルから、レベルアップを果たすために、努力するのだが、その努力はもろろん一朝一夕に実を結ぶものではない。努力を続けてもしばらくは現在の低いレベルに居続けるしかないのだが、自尊心の高い人は、そもそも自分の現在の低いレベルを受け入れられていないので、心のどこかで、「自分のこのようなレベルは不当であり」、「ちよつとした方法を知ればすぐに本来のレベルに到達できるはずだ」と信じているところがある。しかし実際には、少々の努力をしてもレベルアップは果たされないので、そうなる今度は、「この努力の方法が間違っているのでは？」と疑問を持ち始める。そして当然、「正しい努力の方法を教えてください」という発想が起り、その後は「正しい方法」を探し求める放浪者になってしまう。「正しい方法」というのは、一番初めのそれが「正しい方法」だったので、「正しい方法」を知らずに戻ります迷子になるだけだ。自尊心の高い人は、「正しい方法を知りさえすれば、自分はずつとした努力やコツでサツとレベルアップができる」と信じている。この誤解が、当人を方法についての放浪者にしてしまふ。「ちよつとした努力で、サツとレベルアップできる、コツや、正しい方法があるはずだ。自分は今、不当に低いレベルにあるだけで、それを本来のレベルに上昇させるだけだから、そんなことはちよつとしたことで済まされるはずだ」。そう信じている人は、今やっていることの努力にまったく集中できていないので、努力は努力にならず、ごく短時間の「試しに、やってみた」にしかならない。そのような浮ついた努力はむしろ、実を結ぶことが

ない。自尊心の高い人は往々にして、そうして気持ちをハイレベルのことへ「浮気」させて努力しているから、努力が現在のレベルに向き合わない。

「他にもつと正しい方法があるのでは？」と、疑問を持ちながら努力をするとき、その努力は努力にならない。努力というのは常に、目の前の「これ」だ、と当たり前に確信されているときにしか実を結ばない。だからこそ、自尊心の高い人は常に、「自分はそもそも、目の前の『これ』を、ちゃんと疑問なくやる気があるのだろうか？」ということに注意せねばならない。

確かに、教える人によっては、「正しい方法」と、「そうでない方法」が、実際にあるものだが、そうでない方法がやがて「正しくない方法だ」と知られるのも、そのことに十分向き合ってから後のことなのだ。目の前の「これ」を疑問なくやってみるまで、それが正しいか否かの判断さえ持つことはできない。あくまで見つめなければならぬのは「レベルの差」であり、期待されるような「方法の差」はそもそも存在しない。

#### 5. 努力が日々、「身体」に積み重なっているか

豪邸を建設するのに、数年間、汗まみれの苦役である基礎工事を、毎日休まずに続けたら、数年後、その労苦は、すっかり身に馴染むようになって、身体に積み重なっているだろう。今さら土ぼこりをかぶっても、眉一つひそめないようになってくる。どれほど背中が頑丈になったか？ どれほど大きな声が出せるようになったか。両手両足、胴体を貫く芯、身体の隅々まで、労苦は染みわたって自己を鍛えているはずだ。また、柱を垂直に立てるのに、「垂直」ということにどれだけ厳しくなったか。溶接をするのに、どれだけ手先が精密に動くようになり、集中力は途切れなくなったか。チームワークに声を掛け合うということにどれだけたくましくなったか。すべてのことは頭から抜けて、今は隅々まで身体に染みわたっている。

努力というものは、必ず、「日々休みなく」、「身体に積み重なる」という形で成される。決して頭に積み重なるものではないし、知識に積み重なるものでもない。「経験」というあいまいなものへ積み重なるものでもない、間違っても「ノウハウ」というような軽薄なものへ積み重なるものでもない。積み重なる先は常に明確に「身体」だ。

ふと気づいたとき、頭の中にいる思いは巡るけれども、胴体に染みわたって残る努力の痕跡がないという場合は、それは何の努力にもなっていない。努力の結果、努力は「身体」に積み重なっておらねばならず、努力への「思い」が積み重なることに意味はない。

いわば、努力する者は、

「あなたの努力は、今、身体のどこへ積み重なっていますか」

という問いに、

「ここに、ここにす」

と、具体的に、自分の身体を指差して、実感を持って、回答できなくてはならないという義務を負っている。

たとえ、知識を知能の中へ組み込むという、学問へ努力するのだから、その努力は必ず胴体に蓄積する。学問への努力は、デスクへ向き合う胴体の気力、および、重い学術書を支える肘の力や、ペンを走らせ続ける手の力によって形成される。学問への努力によって鍛えられた人間は、朝方にデスクに向かい、十時間後、夕方に部屋を覗いても、なおまったく緩まぬ姿勢で学問を続けている。その姿が努力の成果だ。いわゆる「勉強が苦手」という人も、その大半は、頭が悪いのではなく身体が弱い過ぎない。そして自尊心が高すぎて、自分の低レベルに向き合えない、身体が逃げてしまう、ということが、彼を「勉強が苦手」にしているだけだ。

自尊心の高い人は、自分の「思い」ばかりに注目してしまう。だから非常に、昨日から今日にかけて、自分の「身体」には今、努力がどう蓄積しているか？ ということに、よくよく気をつけねばならない。身体に蓄積しているはずのものが、今日から明日にかけて、色々思いつめたはずなのに、「空っぽではないか？」ということに気をつけねばならない。

努力はそのように、身体に蓄積するものなので、努力は、人のその外見上の姿まで変える。誰でも知っているように、身体に努力を染みわたらせてきた者のたくましさと、頭に思いを巡らせるだけで身体に努力が積み重なっていかない者の虚弱さとは、それぞれの「佇まい／たたくまい」自体が見るからに違ふ。いわば、「佇まいからして、レベルが違う」。どれだけ努力的なことを思っても、そのことによつて佇まいは変わらない。佇まいが変わるのは、身体に蓄積して染みわたったものによつてのみだ。ここまで話されている「レベルアップ」というのは、全て「身体レベルアップ」のことを指している。身体に努力が蓄積していれば、身体はレベルアップしないだろう。人間の声や、笑うことや、あるいは人に訴えかけることも、本当は全て胴体、身体のほうに依拠している。

#### 6. 損傷に高揚してはいないか

レベルアップに必要なことは、「レベル差」をはつきり見ることだ。すでに「努力そのもの」の姿として、ハイレベルを為し遂げている誰かを目の当たりにすること。一方、自分自身はというと、「十人並みだ」ということを改めて目の当たりにすること。そこにあるレベル差を引き受けることから、レベルアップの手続きは始まる。だが、自尊心の高い人にとっては、そうして自分が「十人並み」でしかないということを確認するのは、心理的に非常に耐えがたいものだ。この耐えがたさによつて、人はやけっぱちになったり、自分を傷つけたり、他人を傷つけたりという、蛮行に走ることもある。そうした損傷の行為や「やけっぱち」も、高揚の一つとして、傷ついた自尊心の慰めにはたらくので、自尊心の高い人は、しばしばその損傷と高揚に中毒を

し始める。この中毒には依存性があり、何の利益もないとわかっていながら、いったん依存を起してしまうと、その「やけっぱち」や自傷他傷を繰り返すようになることがある。

身体に蓄積させねばならないのは、「努力」であつて、「ダメージ」ではない。自尊心の高い人が、努力へ向き合おうとすると、しばしば自尊心の耐えがたい苦しきから、身体に努力ではなく損傷を蓄積させることへ傾くことがある。だからこのことに気をつけなくてはならない。

努力というのはどこまでもつまらないものだ。だからこそ、努力は、高揚してするものでもなければ、大げさに悲愴になつてするものでもない。身体に努力を蓄積させるといふこと、労苦や、汗、ヘトヘトになるということ、積み重ねることは、身体をギスギスにしたり傷めたりすることではない。そこを落ち着いて考え、大げさにしないことだ。

十人並みの人間が、しなくてはならない「努力」とは、どう考えてもありふれたものに過ぎないはずで、間違つても必要なのは「自分を傷つけること」であるはずがない。損傷に慰めを得るといふ、しばしば見かける激しさは、激しいといつてもただ悲愴だけで、アプローチとして科学的ではない。十人並みが、それにふさわしい努力をするとき、その努力者は明るく笑つていて何もおかしくない。暗くふさぎ込むほうが不自然で、大げさなことではないか。

#### 7. 努力が自尊心に向かつていないか

レベルの高い者が、何も「偉い」ということではない。「偉い」ということではないが、もし自分自身、そのレベルアップを志すのだとしたら、それはそのレベルの高みを「尊ぶ」心があるからこそ、そのレベルアップを志しているのだ、と言えるだろう。

このとき、その「尊ぶ」という心において、

- ・ 自分を超えて、ハイレベルを尊ぶのか
- ・ それともやはり、自分を尊ぶこと（自尊心）が上位なのか

という比較の問題が出てくる。このとき、その為されるべきレベルの高さより、自尊心のほう結局、尊ぶべき、重要なものなのだということになれば、そもそもそのころ、レベルアップを志す動機が損なわれてしまう。

自己をレベルアップさせようとするとき、その手続き上、まず自分の「低さ」を見なくてはならないのだ。つまり、「目的を果たすためには、いったん自尊心を地に落とさねばならない」ということになる。ここでそもそも目的が自尊心そのものであったとしたら、この手続きは目的に向けて矛盾してしまう。自尊心の高い人は、自尊心を地に落とすからこそ、努力をしようと思つている。これはまるで、「溺れるのが怖い」という動機で水泳教室に来た者が、「まず溺れなさい」という指導を受けるようなもので、

「いや、それが怖いから、水泳を習いたいです」と反論するという、不毛な循環に陥ってしまう。

この不毛な循環構造から脱却する、これという方法などありえないが、たとえ脱却の方法がなかったとしても、構造を知ることが、人の心を落ち着かせる作用がある。ここではこのことを、「レベルアップの構造」ということで理解しておき、心を落ち着かせることにあてがっていい。

自尊心の高い人にとっては、「驚くべきことに」ということがある。驚くべきことに、世の中には、自尊心の保護と強化を目的とせず、何かまったく別の目的をもって、レベルアップを志す人もいるようなのだ。エッ!? その人にとっては、そのレベルの高い何か、そのものが、尊ぶべきものに感じられているらしい。

それで、さらに驚くべきことには、そういう人にとっては、高いレベルの何かを目の当たりにし、比べて自分の低いレベルを思い知らされるということが、むしろ「嬉々として感じられる」ということのようなのだ。そのように、まるで別種の人間が、世の中には本当にいるらしい……

「嬉々として感じられる」。これはまったく、驚くべきことであるはずだ。自尊心の高い人にとっては、レベル差に直面させられるということは、耐えがたい苦しさであるはずなのに、別のある人にとっては、それ自身が「嬉々として」、よろこばしいことに感じられるのだという。まるで、自分のレベルの低さはつきり見え、高いものとのレベル差がつきり見えること、それ自身が「うれしい」というのだ。

そうして、ある種の人にとっては、「レベル差」をはつきり見るということ、それ自身がよろこびだというのだから、俄然そういった人のほうが、レベルアップの方向へ努力することには有利になる。何しろ、レベル差に向き合おう、というような覚悟をいちいちしなくても、嬉々としてそのことを眺めるのだから、手が掛からないし、いつそ手出しのしようもない。

自尊心の高い人は、何を慌てることもなく、むしろ構造を知って心を落ち着けるために、このことを正しく理解すればいい。「レベルアップの構造」があつて、その構造の中、レベルアップに有利な者と不利な者があつて、その有利と不利は、こうして自尊心の差によって分かれたれている。

努力の目的は、何も、自尊心の向上のためとは、限らなかつた。自尊心の低い者は、のほほんとしてまるで向上心がないかのように見えるが、そうではなく、自尊心の低い者の中にも、向上心を持つ者はいるのだ。のほほんとして見えてるのは、ただ単に、彼にとっては何一つも心理的に大げさに映らないということではなかつたのだ。低いレベルをよるこぶ者、レベル差をよるこぶ者は、そうしてのほほんとしながら、自分のレベルの低さを大いによるこびながら、レベルアップを実現していつてしまう。

## 8. 努力が「パワーアップ」に向かつていないか

自尊心の高い人は、レベル差を引き受けられないということに加えて、自分の「ミス」や「失敗」をとんでも嫌がるという性質がある。それは当然、自尊心が高ければ、自分のそうした不出来を見たくはないだろう。特に、ミスや失敗、あるいは不出来が、人前に露見してしまい、笑われたり、バカにされたり、低い扱いを受けたりするというのが、自尊心の高い人にとっては耐えがたいことになる。これによって、自尊心の高い人の努力というのは、どうしても、「ミスや失敗、不出来が発生しえない努力の方向」へ偏つてしまう。その結果、自尊心の高い人の努力というのは、何につけ「パワーアップ」という方向へ偏りがちだ。パワーアップのための努力というのは、筋力トレーニングをはじめとして、その努力自体に「ミス」とか「失敗」とか「不出来」とかいうことが付きまとわない。こうして、しばしば自尊心の高い人は、ひたすら自己の「パワーアップ」という努力に励みがちなが、言わずもがな、パワーアップとレベルアップは別物なので、さんざん努力した結果、レベルアップのほうには実を結ばなかつたということは実によくある。典型的なのは、たとえば、歌を上手くなるうとするとき、その努力が、腹直筋の強化にばかり向かう、というようなことだ。あるいは、声帯周りの筋肉や、長く息を吐くトレーニングなど、それ自体にはミスも失敗もありえない、「パワーアップ」に耽る努力ばかりをする。けれども、たとえば「キックボクサーなら誰でも歌が上手い」ということはまったくないので、腹直筋を徹底的に強化しても、そんなことでは歌を唄うことへのレベルアップにならなかつたのは明白だ。そんなことは、本当は誰だつてわかっているのだが、自尊心の高い人にとっては、しばしば努力というとその「パワーアップ」のみになつてしまう。自尊心の高い人の中には、「何だつて努力します」と言いながら、漠然と、その努力の概念を、ミスも失敗もない「パワーアップ」にのみ向けているということがよくある。そうした歪曲を企むことは、本来のレベルアップに向けて努力することに対して、実はまるで誠実ではない。

自尊心の高い人は、このことに気をつけなくてはならない。努力をし、レベルアップをするというのは、ミスと失敗を繰り返して、不出来を人に笑われ、悔しい思いやみじめな思いをしながら、それでも自分の低いレベルから目を逸らさずに、ミスと失敗に何度も自分で向き合つて、なお努力を続けるということだ。ミスや失敗をすることは、それ自身がレベルアップの過程だし、そのとき自分の不出来を「嫌味なく」笑ってくれる人がいたとしたら、その人はむしろ自分に対してフェアでいてくれる友人なのだ、その存在をありがたく思わねばならない。

努力とこの実際は、ほとんどがこのミスと失敗と不出来の自己確認、その果てしない繰り返しで形成される。だからこそ努力というのは厳しい。特に、自尊心に対して厳しいのだ。

努力とはそうして、ミスや失敗、不出来の無様を繰り返して、人に笑われ

て、みじめな思いをする、ということの繰り返しだ。それでいてなお、そのみじめさの中で、自分とはまるで違う、うらやましいような人のことを、曲げずに見上げていなくてはならない。それが「レベル差をはつきりと見る」ということだからだ。レベルの高い人は、目の前にいて、決して自分のような、ミスや失敗や不出来をやらない。

自尊心の高い人にとっては、そうして生々しく目の前で「レベル差」をはつきり見せられたとき、すさまじい「思い」が湧くものだが、その「思い」を大げさにして、すさまじい「思い」に逃げ込んでほならない。レベル差があるのは元々わかりきっていたことではないか。全ての解答はそのとき目の前にあるのだから、そのときこそ目を背けてはならない。レベルアップのために、「レベル差をはつきり見る」というのはそういうことだ。

### 9. 覚醒

最後に逸脱した項目を付け加えるのは、これもはや注意点でも何でもないからだ。

真に、自尊心から離脱して、「レベル差」をまざまざと見たとき、実は、努力ということをしつぱら飛ばして、いきなりその瞬間に、レベルアップが起こることがある。少なくとも、レベルアップに完全な目的がつかぬ程度、上のレベルに足が掛かってしまう、ということがある。これを僕は、便宜上、「覚醒」と呼んでいる。完全に自尊心から離脱して、「レベル差」をまざまざと見て、歓喜にぶつ倒れそうになったとき、すでに「努力」などしないでも、もう上のレベルへ自己が上昇しているということがある。そのとき、「ぶつ倒れそうになる」のは、瞬間的に、一気に、身体にハイレベルのものが積み重なったからだ。

人間はおそらく、自尊心や自意識から完全に離脱できたとき、そうして目の前に示されたハイレベルのものを、一挙に獲得するという能力を、ある程度とはいえ、持っている。少なくとも、その「覚醒」の原理でレベルアップが起こるとき、そのレベルアップは例外的に急速だ。ぶつ倒れそうになった瞬間の前後で、すでに人格は別のレベルに到達している。そうしたことが、ごくまれにだが、実際のあるのだと、あくまで補項として付け足しておく。

\*\*\*

と、いうわけで、レベルアップということ、本当に考えると、これくらいキツくて憂鬱なものになるのだ。

さあ、酒でも飲んで、イヤなことは全部忘れて、寝ようか、という気持ちになつてくる。

僕なんかまったくそうして不貞寝ばかりして生きてきた。そして、今になって僕などは、年長者から若年のあなたに向けてのものとして、「僕のように生きてはいけませんよ」と、心から言いたいのだった。

レベルアップというのは、そういうものだけれど、何もレベルアップが偉いわけではないし、レベルの高い人が偉いということでもない。

レベルの高い人のほうが値打ちがある、ということでもない。

僕が言うと、まるで言い訳みたいに聞こえるが……

その猫は、何も上等でない、ごくふつうの、猫ちゃんかもしれない。僕が、それが「ごくふつう」であれ、「平凡な猫」であれ、それはかけがえない、世界で一匹だけの、大切な猫ちゃんのはずだ。

他の猫がどうか、関係ない、大切なのは「このコ」なの、というふうにならなければ、ハイレベルの猫ちゃんを、無料で差し上げますと言われたら、「そんなの要りません」と、誰だって心から言えるはずだ。

それが、大切、ということであり、愛している、ということだ。

愛するとか、愛されるとかいうことに、レベルの差なんて関係ない。レベルの差なんて、関係ないが、なお一方で、われわれは、自分のレベルを引き受けて、色んなことのレベル差をはつきり見て、レベルアップに向かわねばならないのだから。

レベルアップなんか、できなくてもいいのだ。

ただ、レベルアップということから、目を背けてはだめだ。

レベルアップということから目を背けて、自尊心を保持することは、愛されるということそのものを、台無しにしてしまうから。

「十人並み」ということが悲しくて、「せめて十人に一人の何かになろう」と、レベルアップに向けて努力したとする。

その結果、すこく努力した割には、「三人に一人」ぐらいにしかなれなかったとしても、本当にレベルアップに向けて努力したなら、「わたし、努力したの」と、そのときは必ず胸を張って言える。

そうしたら、頑張ったね、と愛してもらえ。

レベルが高いとか低いとかは関係ない。

だから、できたらレベルアップということをしつぱら見て、レベルアップへの努力に向かおう。

ハイレベル願望に高揚するような、不誠実な努力ではなく、レベル差をはつきりと見つめ続けた、本当の努力で、レベルアップを目指そう。

その結果、レベルがどこまで上がったかというのは、問題ではない。

レベルとして、「あそこまで到達したかった」という思いが残ることに、気持ちの上で、問題はあってもいなくても、少なくとも、愛されるとい

うことにおいては、何の問題もない。そうして、本当に努力した人のことを、決して誰も笑わないし、バカにはしないものだ。

もし、バカにするような人があったら、そのときは誰かが代わりに、大切なあなたのことを守ってくれるだろう。

たぶん、自分がどのレベルにまで到達できたか、という、「結果」のことは、本人の責任ではないのだ。

本人が、本当の努力をしたなら、その人は必ず、その人らしいどこかにまで、到達したのだから、それで十分、それがその人の栄光のゴールなのだ。

でも、レベルの差をはつきりと見ず、目を逸らして、本当の努力をしなかったとしたら、それは本人の責任だ。

本人に責任がある場合は、愛されたいというのは、ちよつと虫が好すぎるんだらうな。

## 夢は怒りによつて

今僕が住んでいるところは、割と商店街が近いので、朝になるとちらほら、玄関前に、空き缶が捨ててあったり、煙草の吸殻が捨ててあったりする。

そういうことについて、どう思うかというのと、そういつたことは、どんどんやれ、と思っている。

もちろん、これは僕の、完全に個人的な思いだ。

僕は、自分の家の玄関先に、空き缶や煙草の吸殻が落ちていた場合、「いぞ、どんどんやれ」と思っている。

商店街が近いのだ。そして、商店街は、経済的な、生産活動をしているのだ。

人が来て、買い物や、飲食をするのだ。

空き缶の一つや二つ、吸殻の一つや二つ、落ちていないようはどうする。

そんなことより、吸殻を捨てていった奴は、ちゃんとその夜、女とヤツたんだらうな？ ということばかりが気にかかっている。

自分の住んでいる街が、デートして女とヤレもしない街だったとしたら、それこそが一番まずい屈辱で、クソツタレだ、ということになる。

少なくとも、僕はそう思っている。

誰も彼も、そう思えとは、僕はまったく思わない。

僕の考え方を、誰かに強制するつもりはないから、僕だって誰かに、考え方を強制される必要はないだろう。

いぞ、空き缶も吸殻も、ウチの前にとんどん捨てろ。

僕は、正直、そういったことが、自分の玄関先にされたとして、ぜんぜん気にならないのだ。

心が広いわけでは決していない。

僕の思うところを、正直に言えば、

「どれだけ心の狭い奴でも、さすがに、そんな小さなことでキリキリ怒ったりはしないだろう？」

と思っているのだ。

もちろん、今や世情がそうでないことは、僕だってそれなりに知っている。知っているからといって、それを肯定しようとは思っていないけれども。

僕にとって必要なことは、ただ僕の日々と、僕の間が、爆裂ハッピーでありつづけることだ。

僕にとって必要なことは、「玄関先にゴミが落ちていないこと」ではない。

玄関先に、ゴミが落ちていなかったからといって、「やったあ、僕の人生が完成した！」とはならないし、これで爆裂ハッピーだぜ、ということにもならない。

もちろん、物事には限度というものがあって、たとえばチョウチンアンコウの内臓をブルドーザーに満載にしてぶちまけていかれたら、それはさすがに困る。

そのときはさすがに困るが、そこまで凶悪な事象例を、こんな世間話に持ち込む必要はないだろう。

玄関先に、見知らぬ自転車が停めてある場合もしばしばある。

そのときは、

「おつ、ちゃんと、誰かが遠くから、商店街に来てくれているな」

と思っている。

事実、そうだろうからだ。

きちんと駐輪場に停めなさい、とは、僕はまるで思わない。

駐輪場に停めたら、カネが掛かるからだ。

自転車を停めるだけで、カネが掛かるような街に、何度も来たいとは誰も思わないだろう。

何度も来たいと思ってくれなくなると、街の人氣はなくなり、街の生産性は下がる。

そうしたら、街の景気は悪くなり、街の人々の顔つきは憂鬱になり、街の治安は悪くなるだろう。

それ以前に、人の来ない街に住んでいるということは、それだけで精神に廢墟的なダメージを受けてしまう。

だから、そんなことになるぐらいなら、自転車なんか、ウチの前に停めてくれたらいいと思っている。

むしろ、

「すまん、ウチの玄関先は狭くて」

と思っている。

僕だってさすがに、原子力発電所がもう五、六基吹っ飛んで、放射能をバラ撒きますよ、ということになったら、さすがに怒るだろう。

それは、僕の爆裂ハッピーを、大きく妨害するものだからだ。

そういうことは、許されない、と、誰だって思うように、僕だって思う。

ここで話していることは、あくまで、僕の個人的な考えだ。

いつだってそうだが、特に今回は、完全に僕の個人的な考えを、つぶやくようにしている。

もし、誰かが、僕の家の玄関先に、煙草をポイ捨てしたとする。

そのときに、モラル・マニアのおばさんが通りかかって、

「信じられない。あなたのような人がいることは。拾いなさい。あなたって本当に人間のクズだね」

と説教するようだったら、僕としては、

「頼むから、ババア、お前のほうがどこかに行ってくれ、お前こそウチの玄関先に来ないでくれ」

と思う。

これは、僕の感じ方であり、僕の考え方だから、しょうがない。

玄関先に吸殻を捨てていく人は、別に僕を攻撃する意図で、それをしてい

るのではないだろう。それに比べると、モラル・マニアのおばさんは、明らかに誰かを攻撃して

いる。僕は、たとえ自分に対してではないにせよ、誰かが誰かを必死に攻撃しているというところを、見たくない。

僕は決して心が広いわけではないのだ。

玄関先の吸殻を拾うようなことは、何でもないが、モラル・マニアのおばさんと握手するということは、とてつもなくイヤだ。

美少女ならいい。

というぐらい、僕は十分に、心が狭いタイプだ。

煙草の吸殻ぐらい、どんどん捨てていったらいい。

そうして気楽に吸えるほうが楽しいに決まっているだろう。

空き缶だってどんどん捨てていけばいい。

空き缶を持たされたまま街を歩かされるのは邪魔で楽しくないだろう

から、身軽になって遊びに行けばいい。

僕は、赤の他人が、攻撃されているのを見るのがイヤだし、そのぶん、赤

の他人が、それなりに楽しんでいるところを見るのが好きだ。

僕の妄想によると、玄関先の吸殻にキリキリ怒るようなことをすると、運

気が冥王星レベルにまで下がるので、それはイヤだなということもあり、そ

んな不幸なコースにダイブしないよう、「人が楽しめるならそれでいいじゃ

ん」という考え方に、与するようになっている。

ところで、マニア/マニアという語は、もともと「熱」の意味であり、そ

こから敷衍して、マニアックというのには、「正気でない」という意味を持つ

ているらしい。

モラル・マニアの人は、今、世の中に、決して少なくないだろう。

マニアの人というのは、もう、そのことの実現のためなら、なんだってや

る、どんな蛮行でもする、という狂信的テロリストの気質を持っている。

と、勝手に僕は思っているのだが、まったくデタラメかもしれないので、

気にしないように。

ただ、少なくとも、僕がモラル・マニアの隆盛について、ひたすら「恐

怖」を覚えている、というのには事実だ。

マニアックというのは、正気でない、という意味だそうだから。

モラル・マニアが、いいとか悪いとか、そんなむつかしいことは、僕には

わからない。

ただ、僕が「恐怖」している、ということは、僕自身の心境のことなので、

僕にだってわかる。

玄関先に、つい吸殻を捨てて行ってしまった誰かのことは、別に恐怖ではないが、モラル・マニアの人は恐怖だ。

吸殻を捨てて行った誰かは、別に狂信的テロリストの気質をもってそれをしたわけではないだろうから、別に恐怖ではない。

モラル・マニアの勢力が隆盛して、我々が常にその恐怖に監視されるようになったとしたら、そのときはどうすればいいだろうか。

あるいは、実際に、モラル・マニアから攻撃を受け、抗争せねばならないときが来たら、そのときはどうすればいいだろうか。

モラル・マニアの隆盛について、「恐怖」だったとして、それをどう受け止めればいいのか？

それについて、僕は珍しく、「受け止めなくていい」と思っている。何をどうすることもできないのだ。

関心をゼロにするぐらいしか、僕には方法が見当たらない。攻撃されると、被害が出るのだが、被害が出たら手当てして修復し、ただそれだけ、ということに打ち切るしかない。

たぶん、それについて考えるとか、受け止めるとか、そういうしたことのが無駄になるのだ。

僕は、もし、誰かが僕の目の前で吸殻を捨ててしまえば、僕の家の玄関を汚すところを目撃したとしても、ちゃんと、

「いいよ、いいよ、そんなもん」と、気楽に言えるジジイでありたい。

僕がどういうジジイになりたいかは、さすがに僕の勝手なので、これは僕の好き勝手にしていいだろう。

という、理屈も、はたしてモラル・マニアの人には通じるのか通じないのか、わからない。

まあ、そのあたりは、考えていてもしょうがない。とにかく、僕の爆裂ハッピーは、そうした吸殻とか空き缶とかによって脅かされるものではない。

爆裂ハッピーは、夢とか、自由とか、成功とか、可能性とかによって成り立っている。

それらの全ては、ひっそり「夢」と言っていると思うが、僕が怒って立ち向かわねばならないときがあるとすれば、その爆裂ハッピーの「夢」を妨害されたときだけだ。

「夢」とは何か？

そうして、夢とは何か、というような、難しい話は、どこかの誰か、偉い人に訊いたらいい。僕に訊いたって、どうせ僕は「かわいい女の子の、スカートの中、その無防備な、なんちゃらかんちゃら」ということぐらいしか言わない。

実際、それが「夢」だと確信しているのだから、しょうがない。

僕の「夢」は、そのとおり、世界中の街角に散らばっている。

「夢」がいくらでもあるのだ。

なんで吸殻とか空き缶とかが気になるかね？

このとおり、爆裂ハッピーというのは、こうして確実な、無数の、かつ手が届く夢がないと、実現されない。

ところで、吸殻や空き缶に、爆裂の怒りを向ける人は、たとえば日本に移民が参入して来たら、全員かめはめ波で吹っ飛ばす、というぐらいの怒りに、満ちているのだろうか？

吸殻や空き缶の問題より、移民を受け入れたときに起こる騒動のほうが、明らかに深刻で、規模が大きいように思うのだが……

とにかく、そうして考えると、僕には難しいことが一切わからないのだなあ、ということに気づく。僕にわかるのは、その、爆裂ハッピーには

「夢」が要る、ということぐらいで、あとは、「夢」は、怒りによって成り立つんだな、ということぐらいだ。

怒りを持たないと、夢が持てない。というのも、世の中は基本的に、我々が自由とか夢とかを持たないように、圧力的なはたらきかけをしてくるからだ。

世の中というか、世間が、ということになるだろう。僕が、かわいい女の子のスカートの中で、イイネ！ ボタンを押そうとしたら、きつと世間のおばさんは、僕のそれを否定的に見るはずだ。

否定的に見るのは、人それぞれの自由だが、世間というのはしばしば、織田信長よりも横柄に、他人に向けて架空の権力を行使してくるものだ。

世間というのは、たとえばアヴリル・ラヴィーンに対してだって、「ピアスはやめなさい」ということぐらいは言いかねない。

僕は、そうした横柄な、架空の権力が、人の自由と夢を侵害し、特に僕の爆裂ハッピーを無神経に妨害してくるときには、核融合炉を全開した怒りをもって向き合いますよ、と心がけています。

それは、「怒り」なのだから、一も二もない、全て焼き尽くして終わりにしてやる、という決定だ。

悲鳴を聞いてやるほどの酌量もない。

「怒りますよ」と、警告なんか、絶対にしてやらない。

何に対して怒るか、ということとは、僕の個人的なことだから、これもまた、僕の好き勝手にしていいことだろう。

「怒り」なのだから、こっちが一方的に仕掛けて、一方的に完了させるだけで、別に相手に何を認識させてやる必要もない。何の認識もさせないまま、全部終わりましたか？とすればそれだけでよいことだ。

僕は、「怒り」は持っているが、見せしめとか復讐とか、そういうまだるっこしいことへの精神は持っていない。

怒りの対象が、消失すればそれで済むので、最速でそれを済ませるだけだ。



これはもう、決定事項だし、「怒り」のよいところは、そうして何もかもが前もってすでに「決定済み」、というところにある。  
そう考えると、「夢」というのも、まったく同じだな、ということがわかる。

夢はやはり、怒りによるのだ。

「夢」といって、たとえば「野球選手になる」という少年は、もう「野球選手になる」ということが、決定済みのことなのだ。

決定済みのことなので、そのことを最速で済ませる、というだけになる。

決定済みのことに、今さらあれこれ思念を入れなくていいし、またそうして決定済みのことを、他の誰かに認識させてやる必要もない。

もう全て済んでいるのだ。

そうして、怒りと夢は、まったく同質であって、人間の持つ「夢」という現象は、まったく怒りの機能によって成り立っている。

そう考えると、やはり、玄関先の吸殻やら空き缶やら、そんなことに「怒り」なんか持っていられないのだ。

そんなことは、僕の夢でも何でもないから。

夢は怒りによって成り立っているし、夢は怒りとつながっている。

かわいい女の子の子、スカートの中の無防備な、イイネ！ ボタンが夢だということ、そのかわいい女の子の子、スカートの外側は、全て核融合炉を開いた熱で、消失させればいい、ということになる。

怒りがあり、その対極に、つりあって、夢があるのだろう。

居酒屋で出されたカラアゲに、勝手にレモンをかけることへ、全力で激怒する人は、その対極に、つりあう夢、つまりカラアゲにレモンを掛けるかどうかへやさしく六時間話し合っただけの基本的な人権のありようを知り合う、というような世界が、「夢」としてあるのだろう。

人の夢はそれぞれで、人によってはそれが爆裂ハッピーだということのだから、しようがない。

他人が口出しするべきことではまったくない。

人はもちろん、夢など持たなくても、十分に生きていくことができる。

と、たった今、猛烈なウソを言ってみたことで、僕はニヤニヤしているのだが、本当のことを言うと、人は夢を持たないとまったくもに生きていけない。

決定済みのことを持たずに生きていけるなんて、どれだけ肝が太いんだ。

僕にとっては考えられないことだ。

僕が初心者なのかもしれない。

夢は怒りによって成り立っている。

怒りは、「正気」の一つであって、正気を失ったマニアの激情とはまったく異なる。

あるいは、いつの日か、僕だって、玄関先の空き缶や吸殻に、激怒する日

が来るのかもしれない。

そのとき僕は、夢を失っているのだろう。

そのとき僕は、夢を失い、すでに爆裂ハッピーではなくなった、残りの時間に苦しめられて、ただ生きていだけなのだろう。

なるべく、そんな日が、永遠に来ませんように……

どうせ来ないだろうけど、一応……

苦しむのは、僕ではなく、どうかヨソの誰かでありませうに……

と、たまには好き勝手に、僕の個人的な考えのことを言ってみた。

僕はあくまで、僕の個人的な考えにおいてしか、生きていくつもりがないからな。

## レベル差の友人

言わずもがな、僕は一人の男であって、女ではないので、完全な存在ではない。

何をどう頑張っても、僕は男であって、女ではないので、完全な何かになることはできない。

仮に、世の中は、男が半分、女が半分で、形成されているとしたら、僕はそのうち半分をしが知ることができない。

何をどうしたって、世の中の、過半を知ることができないので、何もかもについて、根本的には、「知らん」というのが、本来の正しい態度になる。

たまに、同性から、「女の子に好かれるにはどうすれば」と、訊かれることがあるが、そんな方法は知らないし、そもそも、女の子に好かれるということが、男の役割だとは、僕は思っていない。

むしろ、男の役割はというと、女に嫌われることが、男の仕事なんじゃないの、という気がする。

女に、嫌われること、プラス、それによって、女を女として元気にする、ということが、男の役割なんじゃないのか。

僕が、男として、女に嫌われて、女が「ああいう男ってサイテーよね」という気持ちで満たされる時、その女は、女としての気持ちに満たされているわけだから、ある意味、純粋な「女」として、そのとき存在しているわけだろう。

そうしたら、少なくとも、性的に純粋な時間を持てたということには違いない。

僕などが少々、女に嫌われたとしても、女の側に残るストレスなんて微細なものだ。

それは、女はたくましく、僕のことなんか数秒で忘れてしまうからだ。僕のことなんか、数秒で忘れてしまつて、ただ女としての純粋な気持ちが残り、女として元気になれば、それでいいではないか。

いいではないか、といって、こんな話から、女性の賛同が得られるとはもちろん思っていない。

男が、まともな男であつたとき、女から「賛同」を得ることなんて、ありえるのだろうか？

まあ、とはいえ、こんな話、同性に賛同を求めるつもりも勿論ないので、せいぜい、誰にも気にされないように、目立たないように、わからぬように、僕はやっていきたいのだった。

男なんだから、女に嫌われてこそ、まともだ、と、僕はやっていくわけだが、そんなことをしていても、たまには女に、好かれたり、愛されたり、す

ることもある。

それは、奇異なことなのだが、最近少し、なぜその奇異なことが起こるか

がわかってきた。そうして、僕のことを好いてくれる女がいた場合、その女は、自分が女であることがうれいのだ。

自分が女であることを、愛していて、自分が女であることをはっきり体験させてくれるということについて、僕のことを気に入ってくれるのだ。

彼女は、僕のことを、「男」として無性に軽蔑するから、そのとき、ハツと、

「そうか、わたしは『女』なんだ」

という感触がして、「女」として目の前の「男」を無性に軽蔑できるといふことに、よるこびを覚えるのだ。

だから、「あなたのこと好きよ、わからなかった？」となる。その証拠に、というとおかしいが、そうして僕を愛してくれる女は、決して僕のことを、他の女性に紹介しようとはしない。

それは、当然で、正しいことだ。女が、自分の女友達に、わざわざ軽蔑すべき男を紹介なんか、するわけがない。

紹介された側が、「どういうつもりよ」となって、怒るだけだろう。そんなわけだから、僕はたまに、女に愛されることもあつて、軽蔑されながら、「あなたはそのままいてね」と言ってもらえる。

女に堂々と嫌われて、軽蔑されて、対話の余地なんかない、賛同から最も遠い、そういうあなたのままでいてね、ということだ。

確かに、夜が暗くなければ、昼が明るいと見えなくなるように、男が軽蔑すべき女の敵であつてこそ、女は愛されるべきうつくしい女になりえるだろう。

難しい話をしてしまった。

誰も聞いていなければいいのに、と思っている。

(じゃあわざわざ人に見える形で書き話すなよ、というところだが、そうはいかないのだ)

前に、「肝心なことは全て、レベル差なんだ」という話をした。

人間のすることなんて、みんな同じで、方法も同じ、経験も似たり寄つたりだが、「レベル」が違うので、結果的に得られてくるものの、レベルも違うんだ、という話だった。

たとえば、人と人は、心を開いて、向き合えば、お互いをちょっと親密にする。

そんなことは、誰でも当たり前で、そのやり方は？ というところ、やり方なんて誰でも同じだ。やり方は、そういう感覚で、そういうふうにする、というだけだ。

方法なんてない。探しても無駄だ。

ただ、その同じ方法で、心を開いて向き合うといっても、人によってレベルがさまざまなので、ものすごいレベルで心を開いて向き合うことができれば、結果的に、ものすごい勢いで親密になる、そういうことが起こってくるというだけだ。

あるのはただ、レベルの差なのだ。

中学生の習う数学も、ポール・ディラックの駆使する数学も、方法としては同じ、数学だ。

ただ、レベルが違うから、解かれる数式と、得られてくる知見のレベルも違う、というだけに過ぎない。

レベルというのは、典型的に、〇人に一人、という言い方で表すとわかりやすい。

少なくとも、きれいな女性に相手してもらうためには、どこかの部分で、「こんな人、百人に一人もないわ」という程度には、思ってもらえていなければならない。

そうでなければ、女としては、目の前の男を相手してやる動機がないだろう。

何か、不正なことでもしない限りは、どこかで「群を抜いている」と感じてもらわない限り、人にまともに相手はしてもらえない。

僕がこうして書き話すことも、中には長年、気に入って読んでくれている人があるが、それだって何か、他で読む話より「群を抜いて面白い」と感じてもらっているから、わざわざ読んでくれているのだろう。

一時的にならともかく、数年がかりで、となると、何かしら群を抜いていないと、付き合ってもらえない。

〇人に一人とか、「群を抜いて」とかいうのは、とても厳しい話だが、事実としてそうなのだからしょうがない。

少なくとも、レベルアップを目指して努力するという場合は、その「群を抜く」ということを念頭において、それに向けて努力するしかない。レベルアップしない努力には意味がない。

「群」というのがつまり、現在の「レベル」ということなのだから、レベルアップするということは、まさにその「群を抜く」ということだ。

誰がやっているか、ということがある。

そこで、自尊心の高い人は、まず、自分の群、自分のレベルが低いということを受け入れられないため、レベルアップということにまともに向き合えず、努力が空回りしてしまう。

別にそれが、悪い、とかいうことではない。

そういうことを、前に話した。

ただ、そのことについて、付け足して話したいようなことが、少し残って

いる。

それは、レベル差があるということは、何もその間柄で、友人になれないということではないよ、ということだ。

レベル差があっても友人にはなれるし、友人でいることはできる。むしろ、レベル差があつてこそ友人だ、とさえ言いたく思う。

ただ、そのレベル差が、「わかっていない」のはだめだ。

「わかっていない」のは、心底のアホウか、よほどのコドモだからだ。あるいは、そのレベル差を、「見たくない」とか「認めたくない」とかで、目を背けて、無視しているようなものだめだ。

そんな虫の好いやり方で、誰かと友人であれるわけがない。

自尊心の高い人は、ひよつとしたら、レベルの高い人に向けて、「怖い」とか、「怯む」とか、そういった情緒反応を持っているのではないだろうか。たとえば、ときどき言われるように、「イケメンが苦手なんです」という女性が、世の中には少なからずいるらしい。

実際、そういう女性から、直接話を聞いたこともある。

そういう女性は、たとえば、「イケメンの人と歩いていると、周りの目から、『釣り合っていない』か思われていそうで、怖いです」という。

この話は、よくわかるが、どこからどう聞いても、根本的におかしい。

イケメンとブスが歩いているのだから、どう考えても、釣り合っているわけがないし、傍目には、「釣り合っていない」と見えているに決まっている。そのことの何が「怖い」のやら、意味不明だ。

初めから、釣り合っていない。

僕だって、友人に、特級の美女がいるから、特級の美女と並んで歩く機会はある。

しかも、その特級の美女は、遠慮なく愛情と信頼の眼差しを、僕に向けて歩くので、それはもう傍目からは、「なんだこりや」というほどに、釣り合っていない、と見えているだろう。

それは、当たり前だ。

僕自身、そのときに鏡を見ると、「なんだこりや、釣り合わないにもほどがあるな」と、つくづく思われる。

それはもう、見るからに、逆に写真に収めたくなくなるぐらい、「レベル」が違う。

たまに、僕自身、女性と話すのに、

「こうして、目の前にして話すと、バカだつて思われそうで、怖いです」と言われることがある。

それについても、やはり意味不明だと思うのだが、本当ならそのとき、「こいつバカだ、つて、僕が思っていない、とでも思っているの?」

と言ってやりたい。

言ってやりたいし、実際、そう言い切ってしまうこともある。

そのことの、何がおかしいだろう？

レベルの差があるのだ。

レベルの差があつて、低レベルの女が、目の前で僕に向けて話しているのだから、それは「バカ」に見えているに決まっている。

レベルの低い女が、バカだと思われぬようにする方法、などというものが、この世にあるだろうか。

あるとしたら、もう、ひたすらうつむいて、黙っているしかない。

あるいは、僕のような男が、特級の美女と並んで歩いて、見劣りしない方法、なんてものがあるだろうか。

そんな方法は、ないに決まっている。どう工夫しても、物理的に見劣りしているものを、いつたいどうしようというのか。

方法があるとしたら、もう、光学迷彩でも着て、透明人間になって歩かない。

透明人間になるか、全身を黒一色のペンキで塗って、見劣りもへつたくれもない、というゼロの状態にするしかない。

こここのところを、どうも、勘違いしているのかな、と思わされるがよくある。

レベル差があつて、低レベルなものを、どうして、同レベルに見せかけることができると思うのか？

どこの誰が、そんなごまかしをして許されるだろう。

低レベルな自分が、誰かに会いにくくということ、低レベルをお見せしにくくということであつて、そんなことにごまかしは利かない。

ごまかしは利かないし、そんなところをごまかそうとすることほど、女々しいことも他にないだろう。

レベル差があるのはいいのだ。

レベル差があつて、そのレベル差が、お互いにわかっていたら、それでいいのだ。

そのレベル差が、わかっているかない、というのはだめだし、見たくないとか、認めたくないとか、そういうのはもう論外だ。

レベル差があること自体は、当たり前であつて、何の問題でもないが、「同レベルのふりをする」のは、最悪だ。

そんなわけのわからないことをされたら、友人でいられるわけがない。

人間が、人間として、みんな平等だということは、言われなくても誰だつてわかっている。

人間がみんな平等なのは当たり前だが、かといって、じゃあイケメンにひざまずく女は、僕にも平等にひざまずいてくれるかという、そんなことはありえない。

人間は平等でも、レベル差はあるのだ。

むしろ、人間がみんな平等なんだとわかっていけば、レベル差などということに、今さら怯む必要もないし、目を背ける必要もないだろう。

レベル差から目を背ける人は、自尊心が高くて、心の内では、実は「優劣主義者」なのではないか。

優劣主義者が、自分が劣等のほうへ押しやられることを恐れて、レベル差から目を背けているだけではないだろうか。

そんな荒んだ状態では、誰もともに友人づきあひなんかできない。いいじゃないか、レベル差ごとき。

レベル差があつても、人間は平等だ。

ただ、レベル差があつて、レベルが低いと、誰もともに相手はしてくれない、というだけだ。

男なら、女に、せめて「百人に一人よ」と思わせないと、話にならないし、就職の面接だつて、倍率が百倍のところはいくらでもあるだろうし、何百本もある映画のうち、レンタルして観るのは数本だし、オリンピックの百メートル走に希望者の全員を走らせるわけにはいかないから、各レベルで選別して絞らないといけない。

レベルが低い場合は、そうして注目してもらえとか、相手してもらえとかの、華やかなことがなくなる、というだけで、別に人間の価値が下がるわけではない。

人間はいつだつて平等だ。

僕はただ、僕自身、誰にも相手してもらえないのはさびしいので、いつの間にかレベルアップを目指すようになった、というだけだ。

僕なりのレベルアップを重ねた結果、人間が偉くなったとか、価値が出たとか、そういうことはまったくない。

ただ相手してくれる女の子が増えただけだ。

そんなしょうもないことを、と言われるのかもしれないが、それは僕にとつては重要なことだったので、それでよかったのだ。

他の誰かにとつて、重要なこととは思わないし、他の誰がどんなことを重要に思っているのかは、他人のことなのでわからない。

僕は、一人の男であつて、どれだけ頑張っても、どうせ世の中の半分のこととわからないのだから、せいぜい自分にとって重要なことを積み重ねていくしかないし、そのことを笑われても、正直何を笑われているのかささやくわからないし、興味も今さら起こらない。

そんな、世の中の、超越的なことなんて、超越者に任せて……

レベルの差が「わからない」というのは大変まずい。

レベルの差を、「見たくない」とか「認めたくない」とかいうのは、さらにまずい、それでも人間がそれを選ぶ場合は、致し方ないだろう。

そうなると、レベルアップはしないし、誰とも友人づきあひできなくなる

が、それは当人にとって大したことではないのかもしれないし、それよりもっと大切なことがある、と言いたいのかもしい。

僕にはわからないので、僕はただ、僕にも一応わかることとして、「レベル差があっても友人にはなれる」「レベル差をわかってさえいければ」ということを、話しておきたかった。

\*\*\*

今回話していることは、僕自身の、個人的なことで、関連しているのかもしれない。

最近あまりにも、相談事をされたり、頼られたりということが、多すぎる、異様だ、ということがある。

相談されたり、頼られたりとかいうことは、基本的にどうでもいいことだが、オスがメスのお願いを聞かないというのは不自然なことなので、わざわざ拒絶するようなこともなし、なんとなく、言われたままに相談を受けたりする。

相談事はどうでもいいが、どさくさまぎれに、イイコトができるかもしれないから、あまり理的に断らないようにしている。

それで、最近は特に思わされるのだが、僕は医師ではないので、不具合の訴えを持ち込まれても、そのことに対する処方とか治療とかいうものはないということだ。

誰かの何かを、治療したいとか、癒したいとか、そんなことは、これまでに一度も思ったことがない。

そういうことは、そういうことが大好きな、慈善家のところに持ち込めばいい。

大量のお菓子と、大量のお茶を出してくれて、根掘り葉掘り、相談事を聞いてくれるだろう。

と、そうまで言うと、あまりにも冷たすぎるか。

「どうだ、どう言えばいいのか……たとえ、そうだな、どう言えばいいのか……たとえ、そんなにブツサイクで、清潔感もなく、オシヤレのセンスはホームレスみたいで、頭も悪そうだし、セックスも下手そうだし、無能な旧時代の、ただのおジサンというだけで、直観的には『死ね』としか思えないのに、なんだかんだでちゃんと友人がいたり、きれいな女の人と遊べたりしているんですか？」

と、そういう形で訊かれるとしたら、その話はよくわかる。

なんであれ、「ああ、こいつは、おれのこと注目しているんだな」ということがわかるので、それでいいのだ。

少なくともこの女は、僕に向けて訊いているのであり、自分の何かを訴えているわけではない。

少なくとも、どんな人間だって、医者のところに行つて、医者に向けてこんなことは言わない。

どんな形であれ、この女は、自分と目の前の人間との、「レベル差」に注目して、「レベル差」のことをわかってろうとしている。

「レベル差」を、きちんと受け止めるために、目の前の人間を手探りしているのだ。

そういうことならわかるし、そういうことなら、何も問題はない。

彼女の問いかけを受けて、僕からの回答は、

「そうだね、あなたは、そんなに美人で、清潔感もあって、オシヤレのセンスは読者モデルみたいで、頭もよさそうだし、セックスも上手そうで、この時代の、有能な、目立つほどイイ女で、直観的には『イケてる』としか思えないのに、なんだかんだでちゃんとした友人がおらず、好い人と遊んだりできていないんだね」

「はい。何が違うんでしょう」

「何が違うんだろうね。違いは、あなたが今、目の前に見ているとおりのはずだけれど」

ということになる。

そのようにして、レベル差を見に来た、知りに来た、ということならわかる。

「レベル差」が、わかっていて、受け止められるなら、友人でいられる。レベル差があると友人になれない、ということではないのだ。

友人になれないのは、レベル差が「わからない」とか、同レベルのふりをする、とかいう場合だけだ。

それでたとえば、彼女が、ふとしたときに、

(ああ、そうか)

(この人は、世界の半分以上を諦めて、世界を半分以下に切り捨てて、男だから、ということできているんだ)

(だから、こういう表情で、こういう声になるんだ)

(わたしは、そうは思っていないかった。わたしは、人間として、この世界の全体を体験できるのだと、勝手に思い込んでいたわ)

ということに気づく。

それで彼女は、

「すいません、わたし増長していました」

と頭を下げる。

僕が、

「よろしい。なんだそりゃ」と言う。

以降、彼女は、自分の世界を半分切り捨て、「わたしは男じゃない」「女だから」ということで生きるように努める。

そして、「女だから」と生きていく女の声、女の表情が、自分のものになるまで、努力を続ける。

そうしたら、彼女にも、いつのまにかちゃんとした友人ができていて、いつのまにか、好きな人と遊んだりするようになっていく。

レベルアップしたのだ。

そうしたら、彼女はもう、僕に用事などないだろう。

用事はないだろうけれど、もしどこかで、ばったり会うことがあったとしたら、そのときは「あ！」と、よろこんだ顔を見せてくれるのではないだろうか。

そうはいかないかな、別にいなくてもいい。

僕は男なので、女を女として元気づけるのが、役割だと勝手に思っているし、その役割のために、むしろ女に嫌われることが仕事だと思っているから、しょうがない。

仕事というのは、いつだってイヤなものだ。

人と、レベル差があるのはかまわないし、レベル差があるから友人になれない、ということとはまったくない。

レベル差を、わかって、受け入れて、引き受けて、付き合えれば、ちゃんと友人になれるし、友人でいられる。

レベル差が、わからないとか、見たくないとか、認めたくないとか、そういうのは本当にいけない。

レベルアップがどうこうという以前に、友人を得られなくなってしまう。逆にこうだ。レベル差を、よろこばばよろこぶほど、それは、友人のことをよろこぶ、ということになる。

だから、レベル差をよろこばばよろこぶほど、これからの友人は数多く、より確かなものになっていくだろう。

## あとがきに代えて宝箱

誰だって、色んなことをしているとと思うが、他人が何をしているのかは、よくわからない。

誰だって、何かをしていて、どこかで誰かと、いいことになっていたらいいなあ、と、思うかというところ、それもあまり思わない。

ただ、誰だって、どこかで何かをしていて、いいことに、なっているんだらう。

それはわからないし、わかる必要のないことだ。

女の、身の上話を、聞いてもいいが、聞いたところで、何かが進みはしないし、何かが遅れることもない。

僕だって、なんやかやと、色んなことをしているが、今回なんかは特に、こうしていくら書き話しても、何かずつと、全然書き足りていない、という感触がしている。

ここ二か月で、それこそ僕自身、レベルアップしてしまっただけで、何をやるにしても、負担のかかる程度が上がったのだ。

レベルアップすると、いろいろ、しんどくなるに決まっている。

しんどいというか、時間とエネルギーが、いくらあっても足りない、という状態になる。

それが、いいことなのか、楽しいことなのか、わからないし、そんなことはどうだっていいが、とりあえず、全然書き足りていない気がして、そのことを自分自身、ちよつとした恐怖に思っている。

レベルアップすると、より上位の欲望へアクセスすることになるが、欲望というのはやはり、人間にとつてキリがないのかもしれない。

まあ、恐怖したってしょうがない、誰だってこうして進んでいくしかないのだから、よろこぶ……

最近、ますます、「僕なんか反省しても、しょうがないんじゃないか」という気がしてきた。

それはもはや、思想とか理念とかではなくて、日々の実情に合わせた、実用的なことだ。

具体的に話すことはできないが、このころは特に、

「なんだ、お前は、おれのことキライじゃなかったのか」

というようなことが、増えている。

増えているというか、そんなことばかりじゃないか、という気がしている。

女に、思いっきり嫌われた、というとき、僕だって一応、反省しないではないのだ。

僕のほうはいつでもよくても、向こうの、女のほうは、あまりにも不快が過ぎたら、さすがにストレス量が無視できないだろう。

だから、そういったときは、「しまった、まずかったかな、申し訳ないな、気をつけよう」と、さすがに僕でも反省するのだ。

けれども、後になって、その女が、僕のことをまったくキライではない、という。

「今は、好きなんです」

と言ったりする。

僕としては、驚くというか、それより、

「だって、前、明らかに、イヤそうで、超キライです、みたいな態度だったじゃない。あれ？」

と、さすがに僕だって混乱させられるのだ。

犬が、人に近寄られたくないとき、犬は人が接近するにつれて、身体をギョッと硬くし、その気配そのものを、警告として人に向けてくる。

そのとき僕は、「あっ、ごめんね」と思うし、もしそのことに気づかずに近づこうとしている人があったら、「あっ、だめだめ！」と制止するようにしている。

犬を飼ったことがない人や、犬を愛したことがない人には、わからないのかもしれない。

犬は人間に、決して敵意を向けませんが、怖がるということはある。

怖がっているところの頭上に、手の影が差すと、犬は怖くなって、反射的に噛みついてしまう。

それは、犬にとつて、とても悲しいことなので、人間の側が分かってやらないといけない。

犬はそういうふうには、「大好き」と「怖い」がはっきりしているので、近づくとときに、見間違えようがない。

ところがどうも、人間のほうは、最近特に、自分の情緒とまったく異なる、わけのわからない身体情緒を見ることがあるようだ。

一言で云って、混乱しているのかもしれない。

人に向かって、どういう気持ちで、自分の内に起きていて、どういう身体で向き合えばいいか、深刻に、よくわからない、ということがあるみたいだ。

犬が、大好きな人に、「ウー」と唸ったら、わけがわからないが、どうやら人間は最近、そういうことがあるらしい。

僕が、女に、ちよっかいを出すも、ものすごく不機嫌な顔をされる。

身体をギョッと硬くして、完全に「ムカついた」みたいな雰囲気になるのだ。

ところがなぜか、後になって話を聞くと、

「むしろ、うれしかったんです」

と言われたりする。

「ただ、そのとき自分では、うれしかったって、わかっていなかったんです。そういう経験が、これまであまりになかったから」

「正直に言うけど、あのとき、自分でも、ムカついたのか、うれしかったのか、よくわからなかったんです。ただ、あんなひどい態度を向けるつもりはなかったんです。なぜあんな態度が出たのか、自分でもわかりません」

表面上は、おしゃれで、人付き合いの上手な、笑顔の素敵な女性、と見える女がだ。

僕としては、

「あれだけはっきり、ムカついたって顔をして、その本人もわかっていない裏側を読み取れとか、不可能にもほどがある」

というのが正直なところだ。

これでは、何だろう、たとえばキスをして、そのキスがとっても良かったというときに、こめかみに強烈な肘打ちを食らわされる可能性がある、ということなのだろうか。

そういうことは、今すでに、割と冗談でなくある。

ちゃんと、「女とはこういうもので」「彼氏とはこういうもので」「本命というのとはこういうもので」「セフレというのとはこういうもので」「うれしいうときには人のこめかみに肘打ちをしてはいけません」ということを、教えないかといかないか。

というのは、もちろん悪い冗談だが、半分冗談でないのは、本当にそうして、何もかもを教わって、習って、そのとおりにこなすことが、生きることなんだと、誤解している人が、本当に少なくないようだ。

そして、その教わったことは、親と、教師と、友人と、インターネットと、マンガと、アニメと、動画と、ボーカロイドとで、それぞれに違うから、まとまらなくなつて混乱している。

僕が彼女にちよっかいを出したとき、どうやら、別にそれがイヤだったわけではなく、ただ、そのことに対してどう応じればいいのかを、教わっていないし、習っていないから、「意味不明の対応が出現したんです」ということのようなのだ。

その話は、なるほどなあ、と理解もできるし、同時に、んなアホな、と呆れもする。

僕のやることや、話すこと、人に何かを向けるやり方なんて、絶対に世間一般のそれと違うから、それにどう対応するかなんて、前もって習えるはずがない。

僕もし、目の前の女に、すでに誰でも習ってきたような近づき方しかできないなら、決して一ミリだってそのアプローチをしないだろう。

僕が女に近づくときは、必ず、そのときの新作としての近づき方が、ideaとしてあるから近づくのだ。

no ideaで近づくというようなことはさすがにしない。できるわけではない。

no ideaで、どうやって、人間の身体が駆動するか。  
no ideaなら、そのときの僕は死んでいるので、何をどうすることもできない。

no ideaの、それは、死に体、というやつだ。

そうして、僕は常に、使い捨ての新しいideaを向けるのだから、それにどう応対すればいいかなんて、前もって習えるわけがない。

だがそのとき、僕の話すことや、僕の呼びかけは、決して心底から「わけがわからない」というものではないはずだ。

僕だって、馬鹿ではないので、ちゃんと届くように話しているし、そもそもideaというのはそれ自身が人の感覚や想像力にちゃんと届き、明視できるものだ。

あ、いけない、これは難しい話になるので、やめよう。

とにかく、どうすればいいか？ なんて、習わなくても、こっちからそっちへ、ちゃんと届いているだろう。

まさか僕は、今すでに多くの人が、自己の生や振る舞いの全てを、習ってきたことだけで埋め尽くそうとしているとは、考えもしなかった。

そういうことが、あまりにもしょっちゅうあるので、僕はいよいよ、「そうか、僕が反省しても、しょうがないことのほうが多いんだ」と、判断せざるを得なくなつた。

今、たくさんの、該当する記憶があるのだが、あれだけ全力でヘイトの態度を見せつけておきながら、実は僕のことをキラインではなかったとか、まったく無茶苦茶だと思ふ。

キラインじゃないなら、キラインじゃないで、そこには当然の、そのままの態度を出してくれ。

好きなら好きで、そのとおりの態度を出してくれたら、僕は単純にそう受け取るのだし、それを正反対の態度から汲み取れとかいうのは、いくらなんでも無茶苦茶だ。

無茶苦茶だ、といつても、本人にとつても、なぜその無茶苦茶をやるのか、自分でもわからないのだつたな……

すさまじく当たり前のことを言うが、自分の生きることや、自分がどう振る舞うかというようなことは、習ってきたことだけで、全範囲をカバーはできない。

当たり前だ。

たとえ一流の、キャビン・アテンダントだって、習ってきた振る舞いでカバーできるのは、あくまで業務範囲のことであって、個人的にどうするかというようなことまでは、カバーできない。

たとえば、バスケットボールなら、チェスト・パスとかバウンド・パスとか、習えるし、それをどうキャッチするかというのも、パターンがあるし、何より飛んでくるボールはかならず革製のバスケットボールだ。そうやって、

前もって取り決められている物事の範囲でなら、正しい方法を習っておく、ということとは有効だ。

けれども、実際に生きる上では、たとえば僕は「ほれ」と言つて、猫やアマガエルをパスしてやるかもしれない。それをどう受け取る？ どう受け取るか、猫の受け取り方とか、アマガエルの受け取り方とか、そんなことまで講習で習えるわけがない。

そうだな、だから、そうして猫を渡したとき、明らかにイヤそうな顔をしたら、「あつ、猫がキラインなんだ」と、当然に思うじゃないか。

それが、後になって、「実はキラインじゃなかったんです。むしろ今は、好きなんです」というような、そんなことは、もうどうしようもないが、とりあえず、僕が少なからず混乱するということも、しょうがないということでも認めてくれ。

こんなもの、すでに愚痴でしかないが、さすがに僕だって、十人いれば十人に嫌われて、おれがおかしいのかなあと反省していたところ、実は十人も僕のことをキラインではない、むしろ好き、というようなことでは、もう僕は何を反省していいのやら悪いのやら、わけがわからなくなる。

なんなんだ、ひよつとすると最近では、ハンバーグが好きですという人に、ハンバーグを出すと、「死ね」みたいな顔をするのが、スタンダードなのか？

そういう、しつちやかめつちやかな、人を全力で誤解と混乱に落とし込もうというようなやり方は、即刻やめるべきだ。トヨタだって、ハンドルを右に切ると左折します、というような車を販売はしていない。

どうか僕の場合は、できれば、目玉焼きの乗った牛肉ハンバーグを見る眼差しぐらいで、それなりに好きよ、ということでも、見つめてほしい。

ひよつとすると、まだ教育の初等にある、幼いぐらいに若い人は、人間の振る舞いというのが、アイドルっぽくなったり、キララっぽくなったりすることが、よくできていて完成しているのだと、本当に思っているのかもしれない。

念のため、言うけれど、それは「違う」からね。

人に対して、どう振る舞うかは、そうして「お約束」の振る舞いで処理することがある反面、大事なときは、ちゃんと心と心に通じ合うものがある、その通じてきているもの、胸に向けられて突き刺さっているものに対して、誠実に、自分なりに向き合うのだ。そうしたら、勝手に振る舞いは心から起こってくる。

どうすればいい、ということではなく、そのときごとに、「こうするしかない」という振る舞いが、人それぞれ、そのときに生まれてくるものだから、こうやって話していると、うつつら、本当に怖く感じられてくるな。

自分が、人に対して、どう振る舞えばいいかは、習ってきたことのインデックスの中を、どう検索しても入っていない。



誰がそんな、カード・バトルのようなことをしろといった。相手の出すカードに、対応するカードを、すばやく出すとか、そういう遊び事ではないのだ。

心に触れられたとき、どうすればいいかなんて、そのときのあなたの心しか知らない。

心に触れられたときは、ちゃんと、その心が、どう向き合って応じればいいのか、その場で発見するし、発明もするのだ。

ひよっとすると、本当に、こここのころの原理が、今すでに多くの人で、変わってしまったのかもしれない……

そう考えると怖いことだ。

どう言えればいいかな？ 別に言わなくていい、が、そう、冷たいことを言わないで……

たとえばこうだ。僕はあなたに、宝箱をニュッと差し出す。

あなたは、「あつ、はい」となって、慌てて、腰にぶらさげている鍵の束をまさぐる。

ガチャガチャ、チャラチャラと、あなたは鍵を探すのだけれど、僕は、

「いやいや、その束の中に、鍵はないよ」

「そうなんですか。じゃあ、でも、鍵がないということとは」

「いやいや、そうではなく、もともと宝箱に、鍵なんか掛けてない」

「えっ」

と、こういう具合なのだ。

これまでに習ってきたことの、開錠のための「鍵」のようなものが、腰に無数にぶら提げられているのだが、それは鍵が掛かっている場合に必要なのであって、鍵が掛かっていないならまさぐる必要もないものだ。

どうやって開ければいい？ といって、そのまま、見たまま、パカッと開ければいい。

そんなこと、習わんでもわかるだろう。

今、まじめな人はどうも、

「ちゃんと、たくさんの鍵を揃えたいです！ そしてそれを、いつでもサツと取り出せるようになりたいです」

と、本気で思っているところがある気がする。

そんな、錠前と鍵の組み合わせゴッコなんかしていると、それこそいずれ、神経衰弱になってしまうぞ。

まあ、そんなわけで、だ。

話は、おしまい。

みんな、人それぞれ、色んなことを、どこかでしているのだろうから、どうせやるなら、色々レバルアップするといいな。

お互いに、怯まずに、ごまかさずに、実は自分がズンドコの低レベルでしたあ、ということに、向き合って、笑って、

——大げさにならず、やっていくことにしよう。

大げさになるといいうのは、本当に意味不明で、不毛なことだ。

エネルギーを根こそぎ無駄にしてしまう。

では僕も、引き続き、何も大げさでない夢に向かって、色々やっていくことにする。

夢というのは、何度も言うとおりに、アレのことだ。

じゃあ、おやすみなさい。